

「らい予防法」下の新良田教室――

自主映画「ベルの音が聞こえる」を見る前に

橋 内 武



写真① 映画「ベルの音が聞こえる」のシナリオ（第7版）表紙

0. はじめに―自主映画製作に向けて

人間社会における差別や人権等について考察する時、最も留意すべきことは何か。それは、実態を示す歴史を把握し、苦悩する当事者への理解を深め、将来的に差別という問題を可能な限り消滅させようとする姿勢と努力である。とりわけ、「感染症と差別問題」への追究は、“病と差別”に立

キーワード：らい予防法，ハンセン病強制隔離政策，人権教育，新良田教室，ベル制

ち向かう苦闘の人生を歩んだ人間像を通して、我々が新たな認識の源泉を得ることができるものと言えよう。2020年度桃山学院大学「総合人間学」における受講生の反応（3.8）もその一例である。

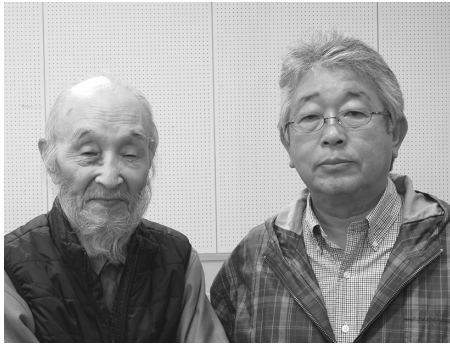
ハンセン病（旧称・らい病）は、結核菌に似た抗酸菌の一種である、らい菌による極めて弱い感染症である。にもかかわらず、らい予防法（1953年）は、癩予防法（1931年）をほぼ踏襲し、徹底した消毒と療養所への強制収容・強制隔離を二大目標とした。だが、全国国立療養所ハンセン氏病患者協議会（全患協）のらい予防法改正闘争による要求のうち、新法成立の際に実現したものがある。それがハンセン病患者のための普通課程高等学校の設置であった。岡山県立^{おく}邑久高等学校新良田^{にいらだきょうしつ}教室（^{ながしまあいせいえん}長島愛生園内）の新設である。1955年9月に創立、1987年3月に閉校。その32年間の在籍者総数397人、卒業生307人を数える。

強制隔離政策下にあった当時、新良田教室の教務室（職員室）と教室の間には、らい菌にまつわる無菌地帯と有菌地帯の間の往来について、さまざまな差別問題が生じていた。無論、生徒と教員の間には「見えない壁」があった。例えば、教員（健常者）は予防着を着て教室に入室して授業を行えた一方で、生徒（患者）は教務室の扉の前で踏みとどまらざるを得なかった。つまり、教員に会うためには、生徒はモールス信号に似た呼び出しベルを鳴らして、教務室外で面談したのである。この制度を「ベル制」と称し、生徒の眼には大きな差別と映った。予防着とベル制を含む「新良田教室の失敗」については、樋渡（2013：211-257）を参照。

このような「新良田教室」の記憶も時を経て、風化の一途を辿っている。主な校舎と教務室はとうになく、その跡地には「岡山県立邑久高等学校新良田教室」の門標と「希望」の碑などが残る。そこで、2018年夏、元教員らが集まり、自主映画「新良田レクイエム」製作実行委員会（能登原昭夫委員長）を結成し、山本 守氏（(株)千里コーポレーション、前作「見え

「らい予防法」下の新良田教室

ないから見えたもの一拝啓竹内昌彦先生」)に監督を依頼した。その後、タイトルはより象徴的な「ベルの音が聞こえる」に改称され、2020年秋にほぼ完成した。瀬戸内市人権啓発映画会(初の公式上映会)が12月5日に瀬戸内市虫明の愛生会館(愛生園内)で開催された。なお、題目下の写真①はシナリオの表紙であり、猫車を押すのは「原老人」役の委員長である。



写真② 能登原昭夫委員長(左)と山本 守監督(右)

この映画はモデルとなった新良田教室の学校生活を、さまざまなエピソードを交えながら描いたものである。中でも「ベル制」に象徴される差別とその廃止こそが、核心テーマである。最終的に、教員と生徒間で数回続いた話し合いによって「ベル制」は廃止に至る。そして、長い年月が経過した後、タイムカプセルから取り出した手紙「30年後の薫へ」の朗読がクライマックスとなる。朝戸 薫は自ら「ベルの音が聞こえますか?」と問うのだが……。

本稿は2020年10月20日に自主映画製作実行委員会のために行った三部構成の講演『「らい予防法」下の新良田教室—自主映画『ベルの音が聞こえる』を視る前に』を再構成して論文の形にしたものであり、橋内(2019, 2020)と重複するところがあることを予めお断りする。なお、「癩」または「らい」は、歴史的な文脈や専門用語(医学・法律)以外では使用しない。

本稿の構成は以下の通りである。

第1部 「らい予防法」下の新良田教室

第2部 自主映画「ベルの音が聞こえる」の世界

第3部 ハンセン病強制隔離政策—新良田教室の背景

これら本編の前後に、「はじめに」と「結びにかえて」を置く。

第1部 「らい予防法」下の新良田教室

1. ハンセン病患者への教育
2. 癩豫防二關スル件—部分的強制隔離政策の始まり
3. 癩予防法—本格的強制隔離政策の始まり
4. 優生保護法による断種・墮胎の強制
5. 未公認教育機関から公立学校分校へ
6. 全国の国立療養所13カ所—連合公立も国立に
7. 国立療養所13の入所者総数の漸減化傾向
8. らい予防法（新法）の施行と新良田教室の開設
9. 無菌地帯（教務室）と有菌地帯（教室）
10. 国立らい療養所入所患者に対する高等学校教育の実施について（覚書）
11. 1955年開設当時の新良田教室
12. ハンセン病医学界の世界的潮流—通院治療が大勢
13. 卒業生の証言①～⑥
14. 沖縄出身者の新良田教室進学

1.1 ハンセン病患者への教育

「らい予防法」（1907年，1931年，1953年）による強制隔離政策は，ハンセン病患者に対する教育にも多大な影響を及ぼした。その要点はつぎの

「らい予防法」下の新良田教室

3つである。

- 1) 太平洋戦争の終結までは、未公認の園内教育が行われた。(愛生学園、光明学園など)
- 2) 敗戦後には、園内に公立小・中学校の分校が開設された。(裳掛^{もかけ}小・中学校第二分校、裳掛小・中学校第三分校など)
- 3) 全患協による「らい予防法闘争」の結果、1953年のらい予防法第14条2項に高校設置が謳われる。(岡山県立邑久高等学校新良田教室設置の根拠法令)

一連の「らい予防法」が廃止されたのは、1996年4月のこと。1907年の癩豫防法二關スル件以来、強制隔離政策が89年間も続いたのである。それゆえ、新良田教室は「らい予防法」の下で、厚生省の主導によって学校経営がなされた後期中等教育機関であった。

1.2 癩豫防二關スル件一部分的強制隔離政策の始まり

癩豫防二關スル件（法律第十一号）成立の背景とこの法律に基づく療養所の設置は、つぎの通りである。

1905年 日露戦争に勝ち、わが国は「一等国入り」したと多くの国民が思い込んだ結果、「浮浪らい」（浮浪患者）を国恥または国辱とする意識が高まる。

1907年 癩豫防二關スル件（法律第十一号）が成立。放浪患者の強制収容・強制隔離を開始。連合公立癩療養所をつぎの5カ所に設置した。（括弧内は現行政区画での所在地）なお、1941年にすべて国立療養所となり、名称を変更した。

①全生^{ぜんせい}病院⇒多磨^{たま}全生^{ぜんし}園（東京都東村山市）

②北部^{ほくほ}保養^{ほよう}院⇒松丘^{まつおか}保養^{ほよう}園（青森県青森市）

③外島^{そとじま}保養^{ほよう}院（大阪府大阪市）⇒邑久^{おく}光明^{こうみ}園（岡山県瀬戸内市に移

転・再興，名称変更)

④大島療養所⇒大島青松園^{おおしませいしゅうえん}（香川県高松市）

⑤九州療養所⇒菊池恵楓園^{きくちけいふうえん}（熊本県合志市）

5カ所の療養所を合わせて全1,100床。全患者のごく一部を収容するものであった。注射薬としては、大風子油が使われた。

1.3 癩予防法一本格的強制隔離政策の始まり

1930年 岡山県邑久郡裳掛村虫明の長島に、初の国立ハンセン病療養所長島愛生園開園。初代園長は光田健輔（強制隔離論者）。1931年3月，全生病院から85名の「開拓患者」を引き連れて着任。

1931年 「癩予防法」改正，全患者を強制隔離。具奉守（韓国名：クボンス，日本名：久保田一郎）愛生園に入所。土木部主任，「^{いちろうどう}一朗道」を建設，1938年入水自殺。

1934年 連合公立外島保養院（大阪）が室戸台風で崩壊。1938年，長島の西端に邑久光明園として復興。（外島保養院の跡には，その記念碑が建てられた。）

1943年 特効薬プロミンの発見，「カービルの奇跡」として記憶される。

1947年以降 日本でもプロミンの生産とそれを注射する療法を開始。

患者を療養所に強制収容するために，戦前戦後に亘って「無らい県運動」¹⁾が行われた。それは官民連携で患者監視体制を強化し，療養所への入所を促すものであった。

1.4 優生保護法による断種・堕胎の強制

1915年，光田健輔（全生病院）が男性患者に初めて不妊手術。未公認手術だが，黙認された。断種・堕胎の強制は，優生保護法を根拠に1948年に始まり，1996年まで続いた。

優生保護法第14条 1 左の各号の一に該当する者に対して、本人及び配偶者の同意を得て、人工中絶〔不妊手術〕を行うことができる。（中略）
3号 本人又は配偶者が癩疾患に罹っているもの（1948年7月）

人工中絶による胎児のために、各園は「胎児等慰霊の碑」（写真③）を建立。但し、奄美和光園^{あまみわこうえん}ではカトリック信者の事務長に理解があり、出産が許され、乳幼児は「名瀬天使園」（1992年閉園）か「白百合の寮」（今なお現存）でカトリック修道女によって養育された。



写真③ 胎児等慰霊の碑（邑久光明園）

1996年4月1日、優生保護法が「母体保護法」に改正され、「不良な子孫の出生防止」に関する条項を削除した。結局、優生保護法は48年間存続したことになる。

1.5 未公認教育機関から公立学校分校へ

- 1) 1.1 に述べたように、太平洋戦争前には、入所患者が教師として働く未公認教育機関が設置された。例えば、愛生園には愛生学園、光明園には光明学園があった。そこで、彼らは「患者作業」の一環として働き、僅かな慰労金（作業賃）を得た。

2) 敗戦後は、療養所内に公立学校分校が開設された。例えば、裳掛村立裳掛小・中学校第二分校、同第三分校である。そこでは、本校からの派遣教諭と補助教員（患者教師）が務めた。

他方、保育所に預けられた「未感染児童」は、公立小・中学校の本校に通学したが、いじめと差別を受けた。この点で熊本の竜田寮事件（または黒髪校事件）を想起したい²⁾。

1.6 全国の国立療養所13カ所一連合公立も国立に

全国の国立療養所は現在13カ所。北から南へ、松丘保養園（青森県）、東北新生園（宮城県）、栗生楽泉園（群馬県）、多磨全生園（東京都）、駿河療養所（静岡県）、長島愛生園（岡山県）、邑久光明園（岡山県）、大島青松園（香川県）、菊池恵楓園（熊本県）、星塚敬愛園（鹿児島県）、奄美和光園（鹿児島県）、沖縄愛楽園（沖縄県）、宮古南静園（沖縄県）である。愛生園と光明園は長島二園、青松園を加えて瀬戸内三園と称せられる。

道府県立連合による5つの連合公立療養所（第1区：全生病院，第2区：北部保養院，第3区：外島保養院，第4区：大島療養所，第5区：九州療養所）は、すべて1941年に国立に移管され、名称を変更した。沖縄の二つの公立療養所も国立に移管されたが、戦後は琉球政府管轄下に置かれ、施政権の本土返還（1972年）により、改めて国立療養所になった。

1.7 国立療養所13の入所者総数の漸減化傾向

『復権の日月』等によれば、国立療養所13の入所者総数（各年5月1日現在）は漸減化の傾向にある。この点で次の表1を参照。

今や療養所入所者が超高齢化して総数が千人を割る時期に入り、将来構想が取り沙汰されている。特筆すべきは、2018年に長島二園（長島愛生園・邑久光明園）が大島青松園と組んで、NPO 法人ハンセン病療養所世

「らい予防法」下の新良田教室

表1 療養所入所者総数の経年変化（『復権の日月』等に基づき橋内作成）

西暦（和暦）	総人数	備 考
1940年（昭和15年）	15,763人	紀元2600年祝賀，映画「小島の春」公開
1950年（昭和25年）	13,805人	朝鮮戦争始まる（～1953年）
1960年（昭和35年）	12,899人	WHO 隔離廃止勧告，安保反対運動と批准
1970年（昭和45年）	11,433人	大阪万博，自主映画の対象とほぼ同時代
1980年（昭和55年）	9,458人	長島架橋中央交渉団園田直厚生大臣に陳情
1990年（平成2年）	7,348人	バブル景気，ドイツ再統一
2000年（平成12年）	4,643人	介護保険制度始まる
2010年（平成22年）	2,469人	菅直人内閣（民主党政権）発足
2020年（令和2年）	1,090人	平均86.8歳，長島愛生園開園90周年

界遺産登録推進協議会（事務局・光明園内）を発足させたことである。

1.8 らい予防法（新法）の施行と新良田教室の開設

1953年にらい予防法（新法）が成立し，公布・施行された。その中身は1931年の癩予防法をほぼ踏襲したもので，太平洋戦争前からの強制隔離政策が続けられた。全患協による「らい予防法改正闘争」の結果，高校設置の要求が新法で認められた。つまり，「らい予防法の第14条 入所患者の教育の2項」には，高校設置が明記されているのである。

全患協は，全国三ブロックの各々に一カ所，全日制の高校を要求していた。だが，

- ①長島愛生園（岡山県）が地理的に日本の中央に位置し，
 - ②瀬戸内三園には当時合わせて3,300名の入所者がいて，全国の療養所入所者総数の三分の一を占めていること，
- などを理由に，愛生園に高校が設立された。選定に当って，離島の不便さは問題視されなかった。

1955年9月，岡山県立邑久高等学校新良田教室が開設された。全寮制昼間定時制普通課程の4年制高校であり，定員1学年30名であった。一期生

の履修した教科は、国語・社会・数学・理科・保健体育・外国語（英語）・芸能・職業家庭であった。一期生には、川島 保・田村保男・冬 敏之・森元美代治がいた。二期生の森 和男・山形弘喜，三期生の提 良三，四期生の西村時夫，五期生の太田 朗・藤崎陸安，六期生の金城幸子，七期生の伊波敏男らも名を留める。関連して 1.13 と 2.5.2 を参照。

1.9 無菌地帯（教務室）と有菌地帯（教室）

新良田教室において、教室は有菌地帯（汚染場所）と見做され、「らい予防法第 8 条：汚染場所と汚染物件の消毒」に従わなければならなかった。教室（有菌地帯）と教務室（無菌地帯）の出入りを厳重にし、教職員による生徒（患者）への差別と偏見を固定化させた。

- 1) 健常者である教員は（予防ズボンを履き、）白い予防着を着て、（予防帽を被り、マスクをして、長靴を履いて）教室へ向かう。（ ）内は開設初期の予防服。
- 2) 教員（特に高齢または心配症の教員）はハンセン病への感染を酷く怖れ、生徒（患者）との接触を避けた。
- 3) 教室から教務室に戻るとき、クレゾール液で手を消毒し、水で洗い直した。
- 4) 生徒からの提出物（紙類）や代金支払いの紙幣は消毒し、一部の教員はその紙幣をガラス窓に貼って乾かした。だが、後に生徒の指摘で中止した。
- 5) 生徒を教務室に入れなかった。それゆえ、生徒は「ベル制」によって個々の教員を呼び出し、呼ばれた教員は教務室の外に出て対応した。

総じて、新良田教室では、教員と生徒の間に物理的・心理的距離があった。

- 1) から 5) までの様子は、すべて映画「ベルの音が聞こえる」にエピソードとして描かれている。

「らい予防法」下の新良田教室

1.10 国立らい療養所入所患者に対する高等学校教育の実施について（覚書）

新良田教室開設に先立って、「国立らい療養所入所患者に対する高等学校教育の実施について」という覚書が、厚生省・文部省・岡山県・岡山県教育委員会の間で交わされた。

1. 定時制普通課程とする。
2. 岡山県教育委員会は、必要な教員を派遣する。
3. 必要なる一切の経費は国が負担する。
4. 必要なる施設、設備は国が措置する。
5. 教職員、補助職員に患者を採用しない。
6. 授業料、手数料は徴収しない。
7. この教育について、入所患者の要望は療養所長を通じて行い、岡山県教育委員会は直接折衝は行わない。
8. 厚生省、文部省は教員の採用について協力する。

（1955年7月21日 厚生省・文部省・岡山県・岡山県教育委員会）

この覚書から、名目上は岡山県立高校の分校であっても、実質的には厚生省が管轄する「国立高校」であったことが明らかである。但し、教員の間では、新良田教室は邑久高校の分校というよりも併置校との認識があった。愛生園には附属看護学校も併設され、今日に至る。なお、「5. 教職員、補助職員に患者を採用しない」とする項には、小中学校との差違があった。これは戦後一時期、療養所内に開設されていた公立小中学校分校では、補助教員や補助職員に患者を採用していた事実があったからである。

1.11 1955年開設当時の新良田教室

新良田教室の名称は、愛生園の「新良田地区」（農区）に由来する。映

画には稲穂が実る光景が映し出される。この名称案は「将来に豊かな実りが期待され、希望ある未来を象徴するにふさわしい」と関係者から賛意を得たのであった。ここで「希望」の二字に注目しておこう。これが後に作られた校歌の歌詞一番と閉校記念碑（ともに 2.14）に繋がっていくからである。

『復権の日月』（2001：178）によれば、開設当初の勤務体制は、常勤教師 5 人、非常勤講師 3 人、その他、事務関係職員 3 人であった。校訓には、1. 自主協同、2. 質実勤勉、3. 敬愛親和、4. 健康明朗が掲げられた。

諸般の事情で、開校は1955年の4月ではなく、9月半ばにずれ込んだ。そのため、初年度は翌年の3月までに1学年分を終えなければならず、一日に6、7校時まで詰め込んで授業が行われた。結局、一期生は実質3年半の在学で、卒業したのである。

1.12 ハンセン病医学界の世界的潮流—通院治療が大勢

ところで、1950年代後半の世界のハンセン病医学界は、つぎのように隔離政策を廃止、通院治療に転換するべきであるという勧告 1) 2) 3) を出していた。

- | |
|--|
| 1) 1956年 ローマ会議（マルタ騎士団主催）で宣言
2) 1958年 第7回国際らい会議（東京）
3) 1960年 世界保健機関（WHO）らい専門委員会 |
|--|

これらの勧告に対して、日本の医療行政は隔離政策に固執し、一切耳を傾けなかったのである。そのような中で、二代目園長の高島重孝は、第7回国際らい会議から愛生園に戻るなり、予防服を着ずに背広姿で教室に現れた。生徒机の間を歩きながら、親しげに会議の土産話をしたという。法令に固執する職員たちとは、一線を画していたのである。

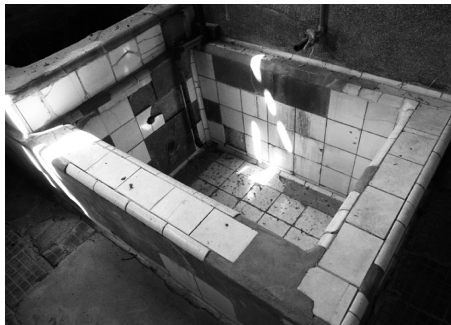
「らい予防法」下の新良田教室

ようやく2001年のらい予防法違憲国賠請求訴訟（以下、国賠訴訟）の熊本地裁判決（杉山正士裁判長）が、つぎのように判示して、事態が急転換した。曰く「遅くとも昭和35年〔1960年〕以降においては、（中略）すべての入所者及びハンセン病患者について、隔離の必要性が失われたと言わざるを得ない」という摘示である³⁾。上記のようなハンセン病医学界の世界的潮流を踏まえて、裁判長は判じたのである。

1.13 卒業生の証言①～⑥

以下は、新良田教室卒業生7人の証言である。〔 〕内は橋内による。

1.13.1 証言①一期生：森元美代治



写真④ 愛生園回春寮のクレゾール風呂

愛生園に行くと、「回春病棟」に入れられて、1週間、検査の毎日でした。……持ち物まで全部消毒するんです。帽子から、時計から、万年筆まで全部、臭い液で消毒されますから、時計や万年筆はだめになって返ってくる。―藤田真一編（1996）。写真④を参照。〔1955年当時は強制隔離論者光田健輔園長の時代であった。〕

1.13.2 証言②一期生：冬 敏之

「卒業に当たって、この学校生活で一番楽しかったことは何か」という

質問に対し、

4年Y君は「1年に入学した時、体育の先生と砂浜で相撲を取ったことが一番印象に残っている」と答えている。[相撲の相手は東原 薫先生であったという。]

以前、教師の予防着のことが少し問題になったことがあったが、ここにはまだ厚い白衣の壁がある。……我々は生徒である前に、H氏病患者であるという意識を植え付けられている。それは、若い魂の余りにも重い負担である。

—「新良田教室論」，愛生 第13巻3号（1959）

および新良田一閉校記念誌（1987）

[冬 敏之（本名：深津^{としひろ}敏博）は、多磨全生園・栗生楽泉園で療養。新良田教室一期生。作家となり、『埋もれる日々』『ハンセン病療養所』『風花』などの作品を残した。2002年2月逝去。享年67歳。]

1.13.3 証言③四期生：匿名（大阪府男性，1942年生れ，愛生園入所）

高校では野球部に入ってピッチャーをつとめました。[1960年の夏] 高校三年生の時、遠征試合をしようと部員で相談して「駿河療養所，多磨全生園，栗生楽泉園，東北新生園，松丘保養園」の5つの療養所に行きました。部員十数名がそれぞれ「帰省願い」を出し，[岡山駅]に集合して集団で行動したのです。各園では大歓迎をしてくれ，美味しい物を食べさせてくれました。

何より「らい予防法」があった時代に高校生が十数名で東海・関東・東北を旅したことは，忘れることの出来ない思い出でもあり，自信にもつながりました。

—ふれあい福祉協会（2018）

1.13.4 証言④五期生：藤崎陸安・太田 朗

[野球部員] 10名は家族の病気などと偽り，夏休みの一時帰省を願い出た。西鉄ライオンズを模したユニホームと野球道具だけを持って別々に島を出た。岡山駅に集合し，鉄道と徒歩で静岡，東京，群馬，宮城の，東日

「らい予防法」下の新良田教室

本の療養所に赴き、入所者や職員チームと対戦。8月下旬、10試合近くを負けなしのまま最終地の青森に到着した。青森では入所者チームに勝利。だが職員チームには0－1で初黒星を喫した。2学期が始まる9月を前に、10人は足早に岡山へ戻った。

—「隔離下の球児」, 朝日新聞第2 岡山 (2019年8月11日)

1.13.5 証言⑤六期生：金城幸子

新良田教室にも優しい心をもった教師が一人だけいた。[阿河真善] 先生という[社会科]の先生で、[瀬戸内市]のお寺の住職を兼ねていた。生徒たちを嫌うことなく、当たり前のように指導してくれた。卒業後も手紙のやり取りをしていつも励ましてもらったが、あの先生がいなかったら高校生活はもっと情けなくなっていたに違いない。

社会に出て新良田の卒業生と名乗ることは、すなわち自分が病気であったことを公表するものである。卒業式の後、私たちは海辺で卒業証書をビリビリと破り捨てた。

—金城幸子 (2007), およびふれあい福祉協会 (2018)
[但し、卒業証書には「新良田教室」の五文字は記載されていなかった。]

1.13.6 証言⑥七期生：伊波敏男

『『新良田—閉校記念誌』』の巻末には、8ページにわたって、歴代園長、学校長、主事、教頭、教職員、事務職員、舎監の名簿が住所とともに一覧できる体裁になっている。しかし、主人公であるはずの卒業生307人の名前が一行たりとも、どこにも記されていないのである。学校存立の社会的位置づけも特殊だったが、歴史の幕引きを飾る刊行物としては、あまりに「象徴的」だった。—伊波敏男 (2007) [卒業生で氏名が出ているのは、新良田教室同窓会会長の森元美代治 (一期生) のみである。他の投稿原稿はすべて氏名を伏せて、「〇期生」とだけ記されている。]

加えて卒業生の奥村 進 (仮名) は、「昭和30年代高校卒業のとき、いま

までの写真……4年間のを全部燃やした。」(蘭 2017: 37) という。アルバム委員であったにもかかわらず、である。

では、一期生から七期生までの卒業生証言から何が言えるだろうか。新良田教室の記憶には、数々の苦々しい思い出(徹底消毒、教員の予防着、卒業証書の破棄、写真の焼却など)が心の奥深くに居座っているのだ。卒業証書破棄や学歴詐称をするということは、蘭(2017: 49)が言うようにハンセン病が「自らの過去を隠蔽・抹殺することを強いる」病であるということである。それに対して、青春らしい冒険を厭わない痛快な体験は、野球部員の東日本遠征や自主企画の「修学旅行」などに限られるようだ。「隔離下の球児」については、映画の中でも懐しそうに語られている。

1. 14 沖縄出身者の新良田教室進学

伊波(2007)や金城(2007)が述懐するように、琉球政府下における沖縄出身ハンセン病患者の新良田教室進学は困難を極めた。1965年まで沖縄の療養所(沖縄愛楽園と宮古南静園)では受験ができなかったため、密かに本土の療養所(星塚敬愛園や菊池恵楓園など)に渡るしかなかった。その事情をふれあい福祉協会(2018)はつぎのように説明している。

1965年(昭和40年)まで沖縄の療養所での受験は認められていなかった。このため同教室に進学するためには、いったん本土の療養所に転園するしかなかったが、出入国管理規定ではハンセン病患者の出入国は認められていなかったので、転園するのも至難の業だった。進学希望者にとって唯一の道は病気を隠してパスポートを手に入れ、愛楽園か南静園から「逃亡」し、乗下船時の検疫を潜り抜けて本土の療養所に入って受験するしかなかった。米軍統治下であるが故の悲哀であった。

「らい予防法」下の新良田教室

なお、『新良田一閉校記念誌』(1987:6)によれば、本土復帰していなかった沖縄からの受験者は、1961年1月以来大島青松園で入学試験を受験できるようになったという。

第2部 自主映画「ベルの音が聞こえる」の世界

1. 自主映画「新良田レクイエム」製作発表会
2. 世界にたった一つ、ハンセン病患者の高校
3. 生徒定員の充足から激減へ
4. 1970年前後の新良田教室という設定
5. 元教員の経験に基づく学校生活の描写
6. 前振りー証言者4名
7. 「ベルの音が聞こえる」の本編
8. 主な登場人物
9. ストーリー（あらすじ）
10. 映画の構成と構造
11. 二代目園長高島重孝の時代
12. 「ベル制」廃止に向けて
13. 初の修学旅行から閉校まで（そして映画化へ）
14. 校歌と希望の碑（表）
15. 希望の碑（裏）
16. 卒業生の進路
17. 念願の邑久長島大橋開通
18. らい予防法廃止と国賠訴訟勝訴
19. ハンセン病補償法（抜粋）
20. エピローグー30年後の薫へ

2.1 自主映画「新良田レクイエム」製作発表会

本稿の冒頭にも書いたように、2018年夏、元教員らが「新良田教室の映画化」を提案、映画監督には山本 守氏が就任した。その後、22名からなる自主映画「新良田レクイエム」製作実行委員会（委員長：能登原昭夫、事務局：茂成詔司）が発足、製作発表会が下記の通り大々的に行われた。

記

自主映画「新良田レクイエム」製作発表会

日 時：2018年10月29日

場 所：岡山県立邑久高校新良田教室跡地

原作者：大家 千

脚本・監督：山本 守

実行委員長：能登原昭夫

副実行委員長：武久源男・谷原和子

長島愛生園自治会会長：中尾伸治

邑久光明園自治会会長：屋 猛司



写真⑤ 自主映画「ベルの音が聞こえる」のチラシ（部分）

なお、映画のタイトル「新良田レクイエム」はその後、再検討の上、「ベ

ルの音が聞こえる」に改変された。その点で写真⑤のチラシを参照。

2.2 世界にたった一つ、ハンセン病患者の高校

この映画（シナリオ）は、次の3行からなる語りで始まる。映画への誘いである。語り手は山本 守監督自身である。

世界にたった一つ、かつて長島愛生園内に存在したハンセン病療養所入所者のための普通科高校。全国からやってきた生徒たちが、そこでどんな生活をし、どんな青春を過ごしたかを紹介しましょう。

製作 「新良田レクイエム」製作実行委員会

脚本・監督 山本 守

2.3 生徒定員の充足から激減へ

一期生や二期生・三期生の頃には、進学を志して学び直そうとした十八歳以上の若人たちが多く進学していたという。冬 敏之（清水編著2016：419）によれば、一期生の平均年齢は20歳6か月で、最高齢の生徒は30歳であった。従って、中学を卒業したばかりの生徒たち（15歳）は小さくなっていたようだ。やがて全国患者数は減少して、時代とともに生徒数も激減していったのである。

『新良田一閉校記念誌』（1987：11-13）によれば、1970年度には、沖縄出身者が3分の2を占め、全校生徒が40名を割り、33名になった。1972年度には、生徒総数が30名を切り、27名にまで減少した。1973年度には、全校生徒数が20名にも満たず、18名にまで縮小したのである。自主映画「ベルの音が聞こえる」は、このような生徒減少期の新良田教室に焦点を当てたことになる。

丹羽弘子は清水編著（2016：526）の中で、新良田教室の歴史を四期に

時期区分している。つまり、①前史：らい予防法改正から新良田教室新設まで（1953年～1955年）、②第一期：生徒数が100名を超える時期（1955年～1963年）、③第二期：生徒と教師がより良い学園を模索していく時期（1964年～1975年）、④第三期：民主的な教育運営がなされる時期（1976年～1987年）である。映画「ベルの音が聞こえる」は1970年前後の学校生活を描いており、第二期に該当する。それは、生徒と教師が「ベル制」廃止へ向けて話し合いが進んで廃止に至る時期、と重なるのである。詳細は2.12を参照。

第三期には、本校（尾張校舎）や他校（特に岡山市内定時制高校三校一岡山県立商業高校・岡山県立工業高校・岡山県立烏城高校）の生徒との交流が進んだ。全日制の尾張校舎まで出掛けることで、生徒間の交流が実現し、本校の授業から刺激を受けることができた。定時制高校間の交流では、＜治療＋学業＞という新良田教室の定時制が、＜勤労＋学業＞という他校の定時制とは、いかに似て非なるものかを知ったのである。

『復権の日月』によれば、一期生の入学学力検査（1955年）には56人が受験し、定員の30名が合格した。女子は3名であった。1980年には7人（5人が沖縄愛楽園出身）に激減、1987年3月の閉校時には生徒1人（沖縄生まれ、全生園出身）だけであった⁴⁾。沖縄では、1965年頃まで新たな患者発生が続き、その後もまれに中高年の発症者（新規または再発）が出た（山口 2018）。在校生激減の主な理由は、①全国の療養所入所者が激減したこと、②幼少期のハンセン病患者の発生が減少したこと、による。

2.4 1970年前後の新良田教室という設定

この映画が扱う時代と場所は、主に1970年前後、岡山県瀬戸内市虫明^{むしあげ}の長島である。その時代には、光田健輔初代園長の後任である高島重孝が愛生園の二代目園長になっていた。映画の登場人物によって語られる当時の

「らい予防法」下の新良田教室

有名人としては、グアムから帰還した元日本軍兵士横井庄一、青春映画のスター吉永小百合、外国映画の俳優、アラン・ドロンやチャーリー・チャップリンらがいる。他にも、1950年代に空手チョップで鳴らしたプロレスラー、力道山が話題に上る。同時代の出来事としては、大学闘争（1969年）、大阪万博（1970年）、新幹線新大阪―岡山開通（1972年）、沖縄返還（1972年）がある。以上が時代背景。

映画「ベルの音が聞こえる」は、長島を中心に、瀬戸内市内や香川県高松沖の「大島青松園」を舞台に展開する。加えて、四季折々の長島と周辺の内海風景が彩りを添える。長島から失踪した恒男を海から救い上げる漁師、釣りに行く西坂先生らを乗せた釣船、愛生園舟越から虫明・日生^{ひなせ}に向かう渡船が大きく映し出される。「春」は満開の桜、夏は「キャンプファイアー」、秋は落日の光景を楽しみ、冬には教師らがダルマストーブを囲む。

この映画は新良田教室の学校生活を描く。スクリーンには、1970年代前半当時に使用されていた建物や設備が映し出される。現在は残存していないものも含めて、男子寮の部屋、教務室、教室、廊下、渡り廊下、一朗道、治療室、校門、講堂、収容棧橋、回春寮、入所者宅、面談室、愛生会館、キャンプ場、女子寮、納骨堂、新良田教室跡地、歴史館（旧事務本館）などで、登場人物たちが喜怒哀楽の表情を浮かべる。今や失われた教務室や一般教室などは、瀬戸内市内の学校を借りてロケを行った。「大島青松園」のロケ地は、屋島と愛生園であったという。以上が主な撮影場所。

また、長島を含む虫明地区以外の地域が誇る郷土遺産も見逃せない。生徒の「五十嵐恒男」が逃亡した折りに、「横田先生」が探し訪ねた先には、画家・詩人竹久夢二の生家もある。劇中劇として上演される、邑久町郷土芸能の糸繰り人形劇が観客を楽しませる。猫車、釣具、瀬戸内の魚、西瓜、菊花、備前焼などは、謂わば「小道具」として使われている。一総じて、

この作品は硬軟相半ばし、人物と風景に音楽が見事に調和している。

2.5 元教員の経験に基づく学校生活の描写

2.5.1 全寮制—治療と通学

シナリオにもある通り、この映画は「実在した定時制普通科高校の教師らの経験に基づくフィクションであり、実在の人物とは関係ない。」という。モデルは邑久高校新良田教室。生徒は各地の療養所で受験の上、愛生園に入所して寮生活を送りながら、教室に通った。授業料を含む学費は無償。生徒には国から給与金が与えられ、朝昼夕の三食とも「配食」された。生徒の一日は治療室での薬をのむことから始まった。1953年に DDS, 1971年にリファンピシン, B663 がハンセン病の内服薬として使われ出したので、生徒たちが服用したのはそのいずれかであろう。映画では、「朝の治療室風景」①と②の場面(2.7)が映し出される。

『新良田—閉校記念誌』(1987: 195-196)によれば、1969年度の教育課程と時間割は以下の通りである。なお、紙幅の関係で、それらは表2と表3として、次頁と次々頁に一括して掲載する。

2.5.2 昭和44年度(1969年度)の教育課程

1969年の教育課程は表2の通りであるが、この当時は手書きの謄写刷であった。新良田教室は普通課程の定時制高校を標榜していたけれども、実学としての職業科目(家庭・商業・農業)も履修し得た。家庭は被服や手芸を、商業は商業簿記と文書実務を、農業は野菜園芸と農業経営を入れていた。これら職業科目の提供は、生徒の社会復帰に向けての配慮であったと思われる。週当り授業時数は、普通科目計21時数、職業科目時数2時数、ロングホームルーム1時数、クラブ活動1時数であり、週当り授業時数は計25であった。

表2 昭和44年度(1969年度)教育課程

教科	科目	標準 単 位 数	学 年 別 単 位 数				教科 総 単 位 数	教 科	科 目	標 準 単 位 数	学 年 別 単 位 数				教科 総 単 位 数
			1年	2年	3年	4年					1年	2年	3年	4年	
国語	現代国語 古典乙	7 5	2 2 2	2 2 1	2 1 1	2 1 1	13	外国語	英語A	9	3	3	2	2	10
社 会	倫理社会	2				2	16	普通科日単位数 計	家庭一般	4	2	2			14
	政治経済	2			3	3			被服Ⅰ	2～6		2	2		
	日本史	3							被服Ⅱ	2～6			2	2	
数 学	世界史A	3	2	2			10	職業科目単位数 計	手 芸	2～10				2	14
	地理B	3		2	2				商業一般	2～5	2	2			
理 科	数学Ⅰ	5	3	2			12	職業科目単位数 計	商業簿記	2～6		2	2	2	14
	数学ⅡA	4			3	2			文書実務	2～4		4	4		
保 体	物理A	3					13	職業科目単位数 計	農業一般	2～10	2	4	4	4	14
	化学A	3				3			野菜園芸	2～12	2	4	4	4	
芸 術	生物	4	4	2			12	職業科目単位数 計	農業経営	2～12	2	4	4	4	14
	体育	2	3	3	2	3			ロングホームルーム時数	2～12	1	1	1	1	
芸 術	保健	2	2	2	1	1	12	職業科目単位数 計	クラブ活動時数		1	1	1	1	14
	美術Ⅰ・Ⅱ	4	2	2					／	／	／	／	／	／	
芸 術	書道Ⅰ・Ⅱ	4	2	2			12	職業科目単位数 計	／	／	／	／	／	／	14
	音楽Ⅰ・Ⅱ	4	2	2					週当たり授業時数 計	25	25	25	25	195	

出所『新良田教室—閉校記念誌』(1987:195)

注 [橋内による追補]

1. 相互に自由選択が可能な科目 [Aは普通科目, Bは職業科目, () 内は単位数]
 ○1年次: A. 芸術(美術Ⅰ, 書道Ⅰ, 音楽Ⅰ) (各2), B. 商業一般(2) か農業一般(2)
 ○2年次: A. 芸術(美術Ⅱ, 書道Ⅱ, 音楽Ⅱ) (各2), B. 商業一般と商業簿記(4) か農業一般(4)
 ○3年次: B. 被服ⅠとⅡ(4), 商業簿記と文書実務(4), 農業一般(4) の3種類の選択が可能
 ○4年次: B. 被服Ⅱと手芸(4), 商業簿記と文書実務(4), 農業経営(4) の3種類の選択が可能
2. 性別により履修が異なる科目
 ○男子のみ: 商業一般と農業一般 ○女子のみ: 家庭一般

表3 昭和44年度(1969年度)時間割表

校時		第1校時 9：20～10：10		第2校時 10：20～11：10		第3校時 11：20～12：10		12：10 ～ 12：20		第4校時 1：25～2：15		第5校時 2：25～3：15			
昭	学年														
月	1	職業	水川, 村田, 渋谷	英語	江尻	古典	宇治	集 会	星 食	生物	石原				
	2	現国	宇治	数学	横田	英語	江尻			職業	水川, 村田, 渋谷				
	3	数学	横田	化学	石原	政経	阿河			英語	江尻				
火	1	古典	宇治	生物	石原	体育	佐藤	S.H.R.	昼 食	現国	宇治				
	2	生物	石原	古典	宇治	地理	阿河			職業	水川, 村田, 渋谷				
	3	現国	尾上	偏社	阿河	数学	横田			政経	阿河				
水	4	職業	水川, 村田, 渋谷	倫社	阿河	現国	尾上	S.H.R.	星 食	現国	尾上	L.H.R.	村田		
	1	英語	江尻	職業	水川, 村田, 渋谷	体育	佐藤(男)			数学	横田			L.H.R.	横田
	2	職業	水川, 村田, 渋谷	地理	阿河	英語	江尻			英語	江尻			L.H.R.	石原
木	3	化学	石原	保健	佐藤	政経	阿河	S.H.R.	昼 食	体育	佐藤(男)	世界史	有道		
	4	数学	横田	化学	石原	政経	阿河			大角(女)	L.H.R.			阿河	
	1	生物	石原	芸術	藤原(美術), 赤枝(書道), 朝倉(音楽)	職業	水川, 村田, 渋谷			世界史	有道				
金	2	英語	江尻	芸術	阿河	職業	水川, 村田, 渋谷	S.H.R.	昼 食	英語	江尻	化学	石原		
	3	数学	横田	地理	阿河	数学	石原			保健	佐藤			英語	江尻
	4	偏社	阿河	職業	水川, 村田, 渋谷	化学	横田			英語	横田			英語	江尻
土	1	現国	宇治	体育	佐藤(男)	現国	宇治	S.H.R.	星 食	数学	横田				
	2	職業	水川, 村田, 渋谷	古典	宇治	体育	佐藤(男)			政経	阿河				
	3	政経	阿河	数学	横田	体育	大角(女)			職業	水川, 村田, 渋谷				
土	4	数字	横田	生物	石原	11：10 ～11：20 S.H.R.									
	1	生物	石原	体育	佐藤										
	2	職業	水川, 村田, 渋谷	地理	阿河										
日	3	職業	佐藤	職業	水川, 村田, 渋谷										
	4	体育													

出所『新良田教室—閉校記念誌』(1987:196)

「らい予防法」下の新良田教室

2.5.3 1969年度（昭和44年度）の時間割

その頃、新良田教室は、表3のように週6日制であった。月曜日から金曜日までは4時間目（午後1時25分から2時15分まで）または5時間目（午後2時25分から3時15分）まで授業があった。土曜日の授業は2時間目までで、ショートホームルームの後に終業した。1時間目の授業は開始時間が遅く9時20分であった。通常3時間目の直後にショートホームルーム、水曜日の5時間目にはロングホームルームがあった。

2.5.4 授業と課外活動

自主映画には、生徒に混じって横田広太郎先生（数学）が、「恒男の失踪」「生徒の自己紹介」や海辺の「キャンプファイアー」などの場面に登場する。世界史の授業中に、母親からの手紙を密かに読む糸満登美子を叱責するのは、香原静雄先生（教頭）である。

放課後には、生徒が自主的にクラブ活動を行い、愛生園入所者が指導・助言をした。特に、演劇部の活動には愛生座の支援が、吹奏楽団の器楽演奏には青い鳥楽団（近藤宏一団長）の協力が得られた。学校祭にはバザー・展示会のみならず、発表会（演劇・吹奏楽）が催された。他方、校内球技大会では、ソフトボールやバレーボールの試合に興じた。

2.6 前振りー証言者4名

この映画は本編に入る前の前振りで、ハンセン病と新良田教室に関する基礎知識を提供する。国立療養所長島愛生園園長の山本典良、長島愛生園歴史館主任学芸員の田村朋久、岡山県立邑久高等学校新良田教室元教諭の横田広太郎、桃山学院大学名誉教授の橋内 武の4名が、証言者として登場する。では、それぞれの証言を聞いてみよう。

第1に、山本園長は、ハンセン病はらい菌によって抹消神経が侵される弱い感染症であり、主な症状に皮膚感覚障害があると言う。かつての難病



写真⑥ 長島愛生園歴史館（2003年開館）

は、今や特効薬で完治する。顔・手足の変形などは、本病の後遺症である。そして、近年は年間発症数が0か1人であり、「恐ろしい病気」という年輩者の思い込みは、国による刷り込みによると思うと語った。

第2に、写真⑥の歴史館で働く田村学芸員によれば、愛生園はかつて有菌地帯（患者地区）と無菌地帯（職員地区）に区別されていて、新良田教室の「ベル制」は両地帯の行き来に関わる問題であるという。同学芸員は、入所者の多くがなぜ園名を使用しているのかについても説明をしている。

第3に、新良田教室の「生き字引」である横田元教諭（写真⑦）は、この教室の存在意義（ハンセン病患者のために開設された唯一の高等学校であること）を強調した上で、園内の愛生会館（写真⑩）で行われた娯楽（映画会・音楽会・演劇公演など）について紹介している。

最後の証言者橋内（写真⑦）は、13の国立療養所を訪ねた結果、一人として感染した医療者がいないことを知り、つぎの事実を確認した。

1. 強制隔離政策は、患者に多大な「人生被害」をもたらし、基本的人権を侵害した。
2. 各地の療養所には「胎児慰霊の碑」があるが、星塚敬愛園の碑文「母の胸に抱かれることなく旅立ったあなた達へ」は慟哭の書である。



写真⑦ 証言者の横田廣太郎（左）と橋内 武（右）

3. 愛生園初代園長光田健輔は強制隔離論者であったが、今では通院治療を奨めた小笠原 登医師が再評価されている。

要は、無知と無関心が偏見と差別を助長する。さらなる啓発活動が望まれる所以である。

2.7 「ベルの音が聞こえる」の本編

映画「ベルの音が聞こえる」の本編は以下のように、全24の場面から構成されている。

- 1) プロローグ
- 2) 恒男の失踪（1963年 7 月）
- 3) ベルの付いた日
- 4) 飲酒事件
- 5) 春
- 6) 6 年後（1969年）
- 7) 入学式
- 8) 教師の一日
- 9) 生徒の自己紹介（新入生）

- 10) 朝の治療室風景①
- 11) 愛生のトラ（山中）
- 12) 宇治先生
- 13) 母からの手紙（糸満登美子）
- 14) 神谷美恵子先生と濱田規夫
- 15) 人形劇団（朝戸 薫）
- 16) キャンプファイアー
- 17) 座談会
- 18) 大島青松園へ（島田宅）
- 19) 朝の治療室風景②
- 20) タイムカプセル（5名が納める）
- 21) 正月（皆川 進と藤井先生）
- 22) 納骨堂にて
- 23) 和解へ（ブザー撤去へ）
- 24) エピローグ（30年後福田を除く4名が再会）

2.8 主な登場人物

映画「ベルの音が聞こえる」の主な登場人物（役所別，男女別，五十音順）はつぎの通りである。

表4 主な登場人物（橋内作成）

		配 役	性 格 と 役 割
岡山県立	生徒	①五十嵐恒男	俳優になることを夢見て、長島から逃亡して大阪に向かうが、諦めて戻ってくる生徒。
		②坂本浩二	五十嵐恒男の同級生、田原 博・島内 忠も同じく同級生。
		③濱田規夫	隔離の島で心を病んだ男子生徒。
		④福田健介	プレイボーイ気味だが、リーダー格の上級生。
		⑤皆川 進	もの静かだが芯のある生徒、正月には帰郷できず、先生と雑煮。

「らい予防法」下の新良田教室

邑久高等学校新良田教室		⑥朝戸 薫	熊本出身の頑張り屋，糸繰り人形劇にも出演。「30年後の薫へ」という自分宛の手紙をタイムカプセルに入れる。
		⑦糸満登美子 <small>いとまん</small>	西表島出身，個性的。授業中に手紙を読んだり，旅行先で集合時間に遅れたりする。
		⑧兄玉良子	いつも笑顔の先輩。
	教員	①香原静雄	教頭。ベル制を巡って生徒たちとの交渉相手になる。
		②太郎先生	明朗で体格が大きい男性教師。
		③西坂先生	濱田君を教えた英語教師，渡船場で神谷医師に出会う。
		④藤井先生	皆川君と正月の雑煮をともにする，人情溢れる教師。
		⑤横田広太郎	誠実な若手教師，数学担当，書道家。
		⑥宇治先生	繊細で心配症の女性教師，国語担当。
		⑦武久先生	五十嵐恒男の憧れの女性教師。
⑧藤原幸子		女性の新任教員，生徒思いの明るく実直な先生。	
職員	①事務長	愛生園の高校担当窓口，ベル制を巡って教頭と対立。	
	②渡辺さん	愛生園（国）から派遣されている職員，ベル制の由来を説明。	
入所者	愛生園	①原 老人	入所者の長老。いつも猫車を押してきて，女性に話しかける。
		②山中 寅	愛生園の古狸的な入所者。回春寮のクレゾール風呂を新任の藤原幸子先生に見せた上で，自宅に招き，夫人が接待する。
	青松園	③島田さん	西表島出身，大島青松園の年配入所者，新良田教室の秋季旅行で来園した同郷の糸満に，沖縄料理のサーターアンダギーを出して歓待する。
医師	神谷美恵子	愛生園の精神科医，濱田君を診療，西坂先生に出会う。	
役職者	①加山二郎	愛生園入所者自治会会長，入学式祝辞（新良田教室創設由来）。	
	②高島重孝	愛生園二代目園長，入学式祝辞（自称「下宿屋の親父」）。	
	③原中校長	岡山県立邑久高等学校校長，入学式祝辞（たまに来室する校長）。	

以上の他に，トラックの運転手（五十嵐恒男を尼崎まで送る），濱田規夫の父（まじめな公務員，規夫と面会），そして皆川 進の母（奄美在住，明朗な働き者）などが登場する。

これらの登場人物のうち何人かは，そのモデルがあるようだ。この点で次頁の表5を参照。なお，「加山二郎」役は，愛生園現自治会会長中尾伸治が演じた。中尾会長は「隔離の歴史を後世に残すべく，さまざまな記憶を形に残す活動の先頭に立つ。」「ハンセン病療養所は病院と違い，強制的

表5 登場人物とそのモデル（橋内作成）

登場人物	モデル
①高島重孝園長	長島愛生園二代目園長・高島重孝
②加山二郎自治会会長	長島愛生園患者自治会執行委員長・加川一郎
③神谷美恵子医師	長島愛生園精神科医師・神谷美恵子
④原中校長	岡山県立邑久高等学校第四代校長・中原悦二
⑤香原静雄教頭	岡山県立邑久高等学校新良田教室主事・教頭・香原鎮雄
⑥横田広太郎先生	岡山県立邑久高等学校新良田教室教諭・横田廣太郎（数学）
⑦西坂先生	岡山県立邑久高等学校新良田教室教諭・山下順三（英語）
⑧太郎先生	岡山県立邑久高等学校新良田教室教諭・三宅太郎（体育）
⑨藤井先生	岡山県立邑久高等学校新良田教室教諭・藤井健二（国語）
⑩宇治先生	岡山県立邑久高等学校新良田教室教諭・宇治敏子（国語）

に隔離・収容され、定員を大幅に超える患者が入所した。軽症者が重症者を看護し、全て患者自身でやらなければならなかった。結婚する際には断種手術が必要だった。こうした人権を無視するような隔離政策を「負の遺産として」残したい。」（毎日新聞 2020.12.25）という。

2.9 ストーリー（あらすじ）

ストーリーは複数のプロット（筋）から構成されている。まず、映画は横田教諭が着任した年の7月に、五十嵐恒男が隔離の島から失踪するという大胆な行動から始まる。彼は、日生から伊部^{いんべ}まで歩き、そこからヒッチハイクで尾崎に向かう。横田先生らは虫明近辺だけでなく、竹久夢二の生家などにも探しに行くが見つからない。恒男は大阪で求職活動をしたが上手くいかず、諦めて島に戻る。後に芝居の役者になり、愛生園の愛生会館で「五十嵐恒男凱旋公演」を行うことになる。本人写真入りの公演ポスターが目を引く。

では、「教師の一日」はどんなものであったのだろうか。すでに述べたように、愛生園は無菌地帯（職員地区）と有菌地帯（患者地区）に分けられ

「らい予防法」下の新良田教室

ていた。新良田教室は、教務室が無菌地帯、教室が有菌地帯とされていた。それゆえ、教員は予防着の白衣を羽織った上で、教室に向かった。ハンセン病への感染を怖れて、神経質な教員は生徒に近づこうとしない。太腿にできた銭形斑紋をハンセン病の兆候かと心配する女性教員もいた。授業が終わって教務室に戻る前に、クレゾール液で手を消毒し、水で洗い直す。生徒から受け取った支払い用の紙幣は、消毒した上で職員室のガラス窓に貼って乾かす。その様子を見た生徒たちの心は傷つく。また、女子生徒らは、通勤時の教師たちの背広姿を見て、「アラン・ドロンみたい」「チャプリンみたい」と言って冷やかした。

つぎに、「ベルの付いた日」が女性職員の渡辺さんによって回想される。当初は単なる呼び出しベルであったものが、モールス信号に似た教員識別ブザーへと変えられた事情が語られる。このエピソードが、後の「ベル制」を巡る生徒たちと教頭との「座談会」に発展していく。生徒たちに理解を示そうとする教頭、法令を盾にベル制維持に固執する事務長—この二人の間で意見が対立する。香原静雄教頭は辞職覚悟で事務長と渡り合った末、生徒たちとの「和解へ」進み、ベルが撤去される。これが映画「ベルが聞こえる」のメイン・プロット（本筋）である。

しかし、新良田教室の生徒たちの心には、行き場のない閉塞感が漂っていた。そのため、島内では悲喜こもごものできごとが起こった。まず、五十嵐恒男が「隔離の島」から逃亡したが、世間の波に乘れずに帰ってきた。つぎに「飲酒事件」。ある晩、男子生徒たちは酒盛りをして気分を解放させたのである。また、濱田規夫には、郷里の奄美で明るく前向きに生きる母親からの励ましがあったものの、とうとう心の病を患ってしまう。一方、長島まで遠路はるばる来てくれた父親とつかの間の再会を果たした皆川進だが、父親から帰省を思い留まるように促される。糸満登美子の郷里は遙か彼方だ。そして、生徒たちは「旅館に宿泊できる修学旅行を」切望し

ていたが、なかなか実現しなかった。このように、彼らが日夜闘っていた病苦と差別は、乗り越えることが困難な障壁となっていたのである。……そのような闇の中に差し込んだ光が、西瓜割りとキャンプファイアーに糸繰り人形劇「あんちゃんと柿の木」の公演であった。

「エピローグ」に関連して重要なのが、「タイムカプセル」を巡るエピソードである。生徒5人が新良田教室の校庭に穴を掘り、タイムカプセルに各々が用意した品物を入れて埋める。30年後に邑久長島大橋で再会するが、福田だけが現われない。糸満は母からもらった思い出の貝殻を欄干から海に投げ落とす。朝戸がタイムカプセルから取り出した手紙「30年後の薫へ」を読み上げる。「ベルの音が聞こえますか？」という最後の問いかけがスクリーンから発せられ、エンディングに向かう。

—この映像作品は、言うなれば「内なる病（感染症）と外からの差別に直面した人々の苦闘と克服のタペストリー」である。

2.10 映画の構成と構造

映画全体の構成は、前振り（4人の証言）と本編（24場面）に二分される。本編はプロローグ（導入）➡ 中核部 ➡ エピローグ（終結）へと進む。メインタイトル（初め）—エンドロール・エンドマーク（終り）も、映画の流れに枠組みを与えるものである。

映画における構造とは、カットとカットまたは場面と場面の関係性を指す。例えば、表6のように左項と右項が対をなし、各々、脈絡のある構造をなす。

「らい予防法」下の新良田教室

表 6 映画における構造（例）

	カット（発端・原因）		カット（関連・経緯・結果・結末）
1	（生徒）恒男の失踪	⇔	「五十嵐恒男凱旋公演」のポスター
2	（糸満の）母からの手紙	⇔	大島青松園（島田宅）、糸満も島田も西表島出身
3	朝の治療室風景①	⇔	朝の治療室風景②
4	ベルの付いた日	⇔	和解へ（ブザー撤去へ）
5	タイムカプセル（5名：福田参加）	⇔	エピローグ（30年後の再会：4名、福田は欠席）
6	タイトル「ベルの音が聞こえる」	⇔	三十年後の薫へ「ベルの音が聞こえますか」

2.11 二代目園長高島重孝の時代

この映画に描かれる主な時代は、二代目園長高島重孝が重責を担った時期である。その頃、愛生園入所者自治会会長は浅田正二、新良田教室の主事・教頭は香原鎮雄であった。

1957年 8 月 （改革者）「高島重孝」二代目園長就任、長島架橋を提案

1964年 4 月 （映画の）「横田教諭」着任

1963年 7 月 生徒「五十嵐恒男」脱出、行方不明

1965年～1972年 神谷美恵子が愛生園精神科医（長）

（映画では、愛生園の船着場に登場）

1970年 大阪万国博覧会開催（「記念コイン」をタイムカプセルに）

2.12 「ベル制」廃止に向けて

「ベル制」廃止に向けての生徒会活動については、『新良田―閉校記念誌』（1987：40-44）にある「ベル制について」の説明が参考になる。それによれば、生徒の教務室への出入りを禁じていた理由は、「①入園者であること、②病気が伝染病であること」であった。1969年の大学闘争とほぼ同時に起きた高校内の民主化運動の中で、「ベル制」への異議申し立てが

始まった。1972年には3回に亘り、生徒会と主事ら学校側との間で話し合いが持たれた。そして、ついに1973年4月16日午後5時にベルが香原主事によって撤去された。ベル制廃止に向かった時代を改めて年表式に記述すると、つぎのようになる。

1969年から継続して生徒会活動の課題として「ベル制」（差別の象徴）が取り上げられた。

1972年1月 太平洋戦争の生き残り、元陸軍兵士横田庄一がグアムで保護されて帰国。

1972年3月 沖縄の施政権が返還され、沖縄県が発足した。沖縄県民の本土への往来が自由に。

1972年3月 新幹線大阪・岡山間開業、東京一岡山間で直通運転開始。

1972年7月 生徒会と学校側との第1回話し合い。

1972年11月 生徒会と学校側との第2回話し合い。

1973年2月 生徒会と学校側との第3回話し合い。

1973年4月 教務室前のベルを撤去⁵⁾。次いで教務室の近くに更衣室兼休憩室を設置。

1974年1月 教務室への出入り自由に⁶⁾。「開かれた学校」になる。

2.13 初の修学旅行から閉校まで（そして映画化へ）

1974年（ベル撤去の翌年） 旅館に宿泊ができる初の修学旅行が実現した。

映画に出てくる「目的地長崎、宿泊先の予約難渋するものの、確保」の挿話は、実話である。

1978年 高島重孝園長が退官し、友田政和三代目園長が就任した。

1987年3月 新良田教室閉校（横田廣太郎教諭24年間永年勤続、2.14「希望の碑」参照）。

2018年7月 閉校後30余年が経ち、「新良田教室」の記憶を映画化しよう

「らい予防法」下の新良田教室

とする動きが出てきた。

2018年9月 自主映画「新良田レクイエム」製作実行委員会を結成，監督・脚本：山本 守。

2020年3月～8月 自主映画「ベルの音が聞こえる」を製作実行委員会が三度内輪の試写。

2020年11月 岡山県立邑久高校百周年記念式典を举行，新良田教室閉校33年後の行事。長島愛生園開園90周年記念式典举行。

2020年12月 瀬戸内市人権啓発映画会で初の公式上映（愛生会館）。

2021年1月 自主映画製作実行委員会主催の上映会開始（愛生会館）。

2.14 校歌と「希望」の碑（表）

	作詞 川島 保
	作曲 提 良三
一	緑の島は空晴れて 世界に続く瀬戸の海 理想は高し若人が こゝ新良田に結ばれて 学ぶ我等に希望あり (以下歌詞二番と三番を省略)

「希望」の碑（新良田教室の趾）



写真⑧ 「希望」の碑（表面）

校歌は、1958年3月11日に制定された。作詞は川島 保，作曲は提 良三であり，ともに草創期の同窓生。へ長調16小節の曲で，歌詞一番は「緑の島は空晴れて世界に続く瀬戸の海」で始まり，「こゝ新良田に結ばれて学ぶ我等に希望あり」で終わる。「希望」の二字に注目。映画では，二番三番の歌詞を踏まえて，『『荒磯の浜』に面した『赤き薔の』高校』と形容されている。合わせて「新良田教室の趾」に建てられた「希望」の碑（表面，

横書き，愛生園三代目園長の友田政和揮毫，写真⑧）を見ておこう。

2.15 「希望」の碑（裏）

「希望」の碑の裏には，縦書きで「人間回復をめざして」で始まる文言が記されている。

人間回復をめざして展開された全患協のらい予防法
改正運動の結果 1955年 9月16日 此地に岡山県立
邑久高等学校新良田教室が開校された。
以来三十有余年 病苦と闘いつつも人間らしく生きた
いとねがい 社会復帰をめざして 研学不拔 心身の
鍛練に励んだ若者は397名 新良田教室 それはここ
に学んだわれわれの青春と栄光のシンボルである。
この希望の碑は閉校記念として 同窓生の永遠の心
の絆となるよう建立されたものである。
1987年 3月 3日 新良田教室同窓会
本校教諭 横田廣太郎書

新良田教室に学んだ者の「青春と栄光のシンボル」として「希望」の碑を残したのである。文案作成には，新良田教室同窓会会長森元美代治と横田廣太郎教諭が関与したという。森元美代治は閉校記念誌に「栄光の新良田教室」と題して寄稿し，「新良田教室こそわれわれの青春のシンボルであり，栄光のシンボルです」と高らかに謳っている。なお，この閉校記念碑は，同窓生と愛生園入所者の寄付によって建立されたものである。

2.16 卒業生の進路

卒業生の進路はつぎのとおりである。中退者等の人数と在園者の割合に注目したい。

在籍した者……………397人（「希望」の碑・裏面を参照。）

「らい予防法」下の新良田教室

卒業した者……………307人／中退者等90人

社会復帰者……………280人（73％）／在園者27％

大学進学者…………… 24人（8％）〔例、森元美代治は慶応義塾大学へ〕

専門学校等進学者…… 49人（16％）〔例、伊波敏男は中央労働学院へ〕

就職先……会社員56％，自営業16％，医療 5 ％，公務員 3 ％，その他14％，
不明 6 ％

2.17 念願の邑久長島大橋開通

高島重孝園長の架橋案（1957年）はさておき，1972年以来17年に亘る架橋運動がようやく実り，邑久長島大橋（写真⑨）は1988年 5 月 9 日に開通した。併せて，愛生園などへの島内道路も整備された。この橋は，「隔離不要の証」，「人間回復の橋」と呼ばれた。愛生園入所者の谷川秋夫は短歌「この橋の成るまで生きむと希ひつつ命果てにし友の幾百」を詠んだ。あの歓喜と興奮から30年以上が経つ⁷⁾。



写真⑨ 邑久長島大橋（左：瀬溝，右：長島）

2.18 らい予防法廃止と国賠訴訟勝訴

- 1) 1996年 3 月 らい予防法の廃止に関する法律が成立，公布・施行。
(1953年 8 月施行されたらい予防法を，ようやく43年後

に廃止したのである⁸⁾。)

- 2) 2001年 5 月 国賠訴訟で原告勝訴,「人生被害」を判示,国は控訴を断念し,判決が確定した。この点で写真⑩を参照。
- 3) 2001年 6 月 「ハンセン病補償法」成立。2.19ハンセン病補償法(抜粋)を参照。
- 4) 2001年 8 月 「黒川温泉宿泊拒否事件」が起きる⁹⁾。「らい予防法」が5年前に廃止されたにもかかわらず,である。



写真⑩ 「らい予防法」違憲国賠訴訟勝訴記念之碑(邑久光明園)

2.20エピローグで,「朝戸 薫」が30年前にタイムカプセルに入れた手紙を朗読する場面では,この間に起きた前記の1) 2) 3) 4)を重ね合わせ,強制隔離政策による「人生被害」を想起したい。以下,3)ハンセン病補償法の冒頭(抜粋)を声に出して読んでみよう。

2.19 ハンセン病補償法(抜粋)

平成13年(2001年)6月22日に公布されたハンセン病補償法(前文の抜粋)は,つぎのように国の過ちを認め,詫びている¹⁰⁾。昭和30年代には通院治療が世界的潮流になっていたのだ。[]内は橋内による追補。

「らい予防法」下の新良田教室

ハンセン病の患者は、これまで、偏見と差別の中で多大の苦痛と苦難を強いられてきた。我が国においては、昭和28年〔1953年〕制定の「らい予防法」においても引き続きハンセン病の患者に対する隔離政策がとられ、加えて、昭和30年代に至ってハンセン病に対するそれまでの認識の誤りが明白となったにもかかわらず、なお、依然としてハンセン病に対する過った認識が改められることなく、隔離政策の変更も行われることなく、ハンセン病の患者であった者等にいたずらに耐え難い苦痛と苦難を継続せしめるままに経過し、ようやく「らい予防法の廃止に関する法律」が施行されたのは平成8年〔1996年〕であった。

我らは、これらの悲惨な事実を悔悟と反省の念を込めて深刻に受け止め、深くお詫びするとともに、ハンセン病の患者であった者等に対するいわれのない偏見を根絶する決意を新たにするものである。（以下略）

2. 20 エピローグ—30年後の薫へ

タイムカプセルを開けて

（映画では女性の声で）

30年後の薫へ

君は今でも弱虫ですか？

優しくて働き者のお母さんは元気ですか？

ハンセン氏病への偏見はとっくになくなりましたか？

私たちが学んだ学校のことを、胸を張って平気で話せる時代がそこにあ



写真① 「岡山県立邑久高等学校新良田教室」の門標と校庭

りますか？

それとも・・・今でも時々，

・・・ベルの音が聞こえますか？（終）

薫の手紙は、＜宛先＞＜問いかけ1＞＜問いかけ2＞＜問いかけ3＞＜問いかけ4＞＜問いかけ5＞という文章構造をなす。問いの繰り返しは、音楽のクレッシェンドにも似ている。手紙「30年後の薫へ」は薫自身に宛てたものであるが、同時に鑑賞者への重い問いかけでもある。「ベルの音が聞こえますか？」とは、「（回復者への）差別が続いていますか？」の意である。（その彼女の声が流れる中、スクリーンには「らい予防法廃止」「違憲国賠請求訴訟原告勝訴」「ハンセン病補償法成立」の文字列が字幕に現われる。ここで、この30年間に起きた強制隔離政策に関する司法判断や立法化の流れが想起されよう。）

—そして、挿入歌「長島航路」に合わせて、牡蠣筏が浮かぶ虫明の海がロングショットで移り変わりつつ、エンドロールとエンドマークとなる。

第3部 ハンセン病強制隔離政策—新良田教室の背景

つぎに、新良田教室の背景にあった「らい予防法」によるハンセン病強制隔離政策とはどのようなものであったか、国はどのような過ちを犯したか、それに対して国は患者・家族にはどのような償いをしたかについて改めて確認する。

1. ハンセン病患者が受けた差別の実態
2. 強制収容・強制隔離・終生隔離
3. 療養所内における差別構造
4. 懲戒検束権と監房における人権侵害
5. 強制隔離政策の廃止と償い

6. ハンセン病患者家族への償い
7. 国が怠った義務などーハンセン病家族国賠訴訟
8. 桃山学院大学「総合人間学」における学生の意見①～③

3.1 ハンセン病患者が受けた差別の実態

3.1.1 国立療養所13園ー離島・辺地に

国立ハンセン病療養所は既述の通り、北から南へ、松丘保養園から宮古南静園まで13カ所にある。離島・辺地が選ばれたのは、患者隔離に適地であると判断されたからである。療養所によっては、高い柵か檜の生垣や高いコンクリートの塀で囲まれていた。それらは隔離の象徴であった。

3.1.2 離島の療養所

瀬戸内三園（長島愛生園、邑久光明園、大島青松園）は、内海の離島に設置された¹¹⁾。1988年5月に虫明の^{せみぞ}瀬溝との間に邑久長島大橋が架橋され、長島二園は離島の不便さを解消した。他方、青松園（旧称大島療養所）は高松市沖の大島にあり、一日数回高松（または庵治^{あじ}）から往来する官有船が唯一の交通・運搬手段である。映画では、生徒の糸満が入所者の島田宅で歓談する姿が、「青松園へ」の場面に映る。沖縄愛楽園は、名護市の屋我地島に立地するが、今では屋我地大橋とワルミ大橋によって沖縄本島と繋がっている。



写真⑫ 邑久長島大橋の
たもと

3.1.3 「陸の孤島」にある療養所

東北新生園、星塚敬愛園などは「陸の孤島」にある。まずは陸奥^{みちのく}へ。新生園は宮城県登米市^{とめ}迫町^{はさまちょう}新田字葉ノ木沢にあり、近くにこれといった集

落はない。最も近い最寄駅はJR東北本線の瀬峰駅であり、そこから車で約7分。あるいは東北新幹線くりこま高原駅からタクシーで約12分という寒村にある。新幹線の小駅からはどこまでも人家のない平地が続く、療養所が忽然と姿を現わす。蓮池の向いにしんせい資料館（旧新田小中学校葉ノ木沢分校）がある。見学者にはケースワーカーが対応している。

つぎに西国^{さいごく}へ。敬愛園は鹿児島^{かのや}県鹿屋市星塚町にある。鹿屋市は大隅半島の小都市である。国鉄大隅線はとうに廃線、鹿屋に駅はない。そこで、鹿児島中央駅から垂水フェリー経由の長距離バスに乗って鹿屋バスセンターまで行く。市心は正に「シャッター街」で、ひどく寂れている。そこからタクシーに乗り継いで約15分。鹿児島から3時間半かけてようやく敬愛園に辿り着く。遠方から給水塔がよく見える。社会交流会館が見学先だ。

離島の中の辺地にあるのが、宮古南静園（旧称宮古療養所）だ。宮古島は沖縄本島から262.5km。療養所は島その他集落から孤立した、平良^{たいら}字島尻に佇む。三方丘に囲まれた海際にあり、人権啓発交流センター（ハンセン病歴史資料館）を訪ねる。ボランティアが熱心に解説してくれる。

3.1.4 都市の周辺か集落の外れに立地

ハンセン病療養所は忌避施設と見做されたため、他の療養所も都市周辺（多磨全生園、菊池恵楓園、奄美和光園）または既存の集落から外れた所（松丘保養園、栗生楽泉園、駿河療養所）に造られた¹²⁾。私立療養所はカトリックの神山復生病院（静岡県御殿場市）が残るのみである¹³⁾。

3.2 強制収容・強制隔離・終生隔離

強制隔離政策によって、ハンセン病患者は強制収容・強制隔離・終生隔離を強いられた。上記の政策は、国家（公益）をハンセン病から衛るという「社会防衛論」に基づく。そのような目的で、戦前は内務省下の警保（警察官）が、戦後は自治体職員等が、ハンセン病患者の監視に関わった。

「らい予防法」下の新良田教室

戦前戦後の「無らい県運動」は、ハンセン病患者のいない県を目指す、官民一体となった運動であった。この運動は「民族浄化」（戦前）や「公共の福祉」（戦後）を錦の御旗とした。その結果、国民に「らい病は恐ろしい伝染病」と思わせた。この点で山本典良園長の証言を聴き直したい。

強制収容には、刈り込み収容と門前収容があった。刈り込み収容とは、ハンセン病患者がいとされる家を戸別訪問し、患者を強引に連れ出し、収容トラックや「お召し列車」（ハンセン病患者用車輛）に乗せて療養所に送り込むものであった。患者の出た家は徹底的にクレゾール消毒が施され、患者の生活道具が悉く廃棄された。風評被害により、家族の者もそこに住めなくなるほどであった。他方、門前収容とは、ハンセン病の罹患が疑われる患者自らが療養所を訪ね、陽性であれば収容されるというものであった。中には、陰性でも収容された事例があるという。

入所すると、回春寮でクレゾール風呂に入らされ、持参品も徹底的に消毒させられた。入所当初は一週間ほど種々の検査を受けた。その上で、入所者は皆同じ^{あわせ}衾を着させられ、入園番号が与えられた。そして園名（偽名、外国人は日本名）を何とするか、信じる宗教・宗旨宗派は何かと問われた。そして死後の遺体解剖に予め同意するよう求められた。持参した現金は取り上げられ、日銀券の代りに園券が与えられ、「園内通貨」として使われた。園券の実物は、園内の歴史館や社会交流会館で見ることができる。

らい予防法は退所規定を含まなかったから、事実上、強制隔離は終生隔離であった。それゆえ、入所者が園内で亡くなると、遺体は園内の火葬場で焼かれ、遺骨は納骨堂



写真⑬ 納骨堂（長島愛生園）

(写真⑬)に収められた。そこには、郷里の墓に入れない遺骨が多数眠っている。ここで火葬と遺骨の一首一句を紹介。

- ・退園は煙突からと言ひをりし友の棺を火屋に見送る 佐藤忠治（多磨全生園）
- ・もういいかい骨になってもまあだだよ 中山秋夫（邑久光明園）

映画づくりの際には、愛生園の納骨堂でロケが行われた（「納骨堂にて」）。なお、どの療養所にも寺院や教会などの宗教施設があり、様々な宗教儀礼が執り行われてきた。

3.3 療養所内における差別構造

ハンセン病療養所内における代表的な差別と差別構造には、つぎの九つが挙げられる。

3.3.1 無菌地帯と有菌地帯—職員地区と患者地区

療養所内は、「無菌地帯」と称する職員地区と「有菌地帯」と称する患者地区に二分された。長島二園には、職員栈橋と患者栈橋があり、それぞれ別の栈橋から上陸した。光明園には木尾湾に突き出た蟹手状の両栈橋があり、愛生園には舟越栈橋と収容栈橋があった。下の写真⑭⑮を参照。



写真⑭ 愛生園の舟越栈橋



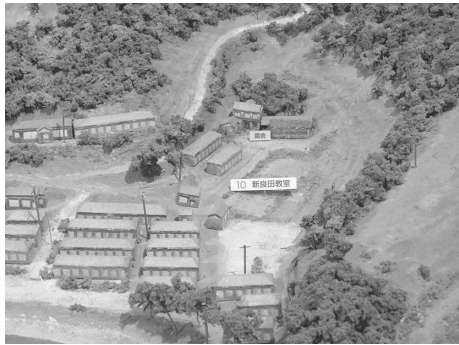
写真⑮ 崩壊進む収容栈橋

医療従事者を含む職員は職務上、患者地区に出入りし得た。だが、患者

「らい予防法」下の新良田教室

は無菌地帯である職員地区に「立ち入ルベカラズ」「立ち入り禁止」であった。つまり、患者は移動の自由が制限されていたのである。写真⑩からも分かるように、愛生園歴史館のジオラマ（立体模型）を見ると、中央に境界線が曲線で引かれ、園内が東西の両地区（東：患者地区、西：職員地区）に分かれていたことが判明する。新良田教室は愛生園東部の患者地区にあったが、その教務室は職員地区（無菌地帯）扱いであった。

なお、療養所によっては、清潔地帯・不潔地帯、無毒地区・有毒地区といった差別的対称を付けて、入所者が職員地区に入るのを禁じていた。



写真⑩ 愛生園歴史館のジオラマ（部分）

（左）画面中央に走る曲線が境界線 （右）東部にあった新良田教室

3.3.2 軽症者と重症者—患者作業の有無

入所者のうち、軽症者には土木・建設作業から農作業・畜産活動，家事・家政，病人看護，患者の遺体焼却と納骨に至るさまざまな作業（強制労働）が課せられた。他方，重症者は患者作業を免除されて病棟で治療に専念していたが，無資格の軽症者が医療補助と看護に当たった。患者数に対して，医療者（医師・看護師）の総数が慢性的に少なかったのである。『全患協運動史』（1977：77）が裏づけているように，より充実した治療が受けら

れた結核療養所の患者とは有意の差があった。軽症者は治療よりも「患者作業」（強制労働）に明け暮れたが、慰労金は僅少であった。療養所は、低予算・低医療・医療者不足で運営されていたからである。

3.3.3 晴眼者と視覚障害者—国民年金の有無

晴眼者と視覚障害者の間にあった差別は、国民年金の有無である。1955年に全国ハンセン病盲人連合協議会（略称・全盲連）という団体を組織した。だが、視覚障害者は1959年まで国民年金制度の枠外にあったため、年金が支給されなかった¹⁴⁾。➡障害福祉年金の受給。

3.3.4 日本人と外国人—国民年金の有無

療養所には外国籍の者も入所している。戦前、朝鮮から渡日したコリアンがほとんどである。日本人とは異なり、彼等には日本国籍がないため、国民年金が支給されなかった。そこで、在日朝鮮人・韓国人ハンセン病患者者同盟（略称・在日患同）を設立し、年金獲得運動を推し進めた。日本は1979年国際人権規約を批准し、1981年難民条約に加盟した。それに伴い、1982年に国民年金制度から国籍条件が外れた¹⁵⁾。

3.3.5 男性と女性—3対1の不均衡

一般にハンセン病は女性よりも男性に発症し易い。そのため、入所者の男女比はほぼ3対1であった。このような不均衡は、園内婚の機会に大差をもたらした。男性は生涯独身を続けなければならない者がいた一方で、女性の再婚・再々婚は珍しくなかった。だが、夫に先立たれると、未亡人は独身寮に戻らなければならなかった。

3.3.6 親と子ども—分離収容・未感染児童・家族崩壊

親子が一緒に入所した場合、親と子は分離収容により引き離された。親は成人寮または夫婦寮に、子どもは青少年少女寮に収容された。親がハンセン病患者で、健康な子どもは「未感染児童」と呼ばれ、無菌地区の児童施設（保育所）に預けられ、そこから公立校に通った。未感染児童が通学差

「らい予防法」下の新良田教室

別を受けた事例が、熊本の竜田寮事件（または黒髪校事件）である。親か子どものいずれかが入所した場合、たちまち家族は崩壊し、親子関係が断絶した。

3.3.7 独身者と夫婦一通い婚・雑居結婚も

独身者は当初、男子も女子も独身寮（大部屋）で雑居生活を送った。結婚当初は新郎が新婦のいる女子寮に通う「通い婚」であった。ついで、数組の夫婦が一緒に雑居部屋で生活した。その後、愛生園では寄付を募り、「^{とつば}十坪住宅」と称する六畳二間の二世帯住宅が建てられた。その一軒が今も残る「^{ロータリー}徳島路太利」である。このように見てくると、プライバシーのない生活を強いられていたことが分かる。現在では入所者住宅の棟割り毎に一世帯が住むのが一般的で、単身世帯も同様である。

3.3.8 派遣教諭（健常者）と補助教員（患者）

1940年代後半に学制改革があり、旧制尋常小学校と高等小学校は、基本的に新制小学校と中学校になった。国立療養所内では、未公認教育機関に代わって公立小中学校分校（複式学級）が開設された。そこでは、本校からの派遣教諭と入所患者の補助教員がいた。両者の間には大幅な待遇上の差違があり、教員用の部屋も扉一つ隔てて派遣教諭室と補助教員室とに分かれていた。その実例は、東北新生園内に残る、旧新田小中学校葉ノ木沢分校に今でも見ることができる。

3.3.9 新良田教室の教員（健常者）と生徒（患者）

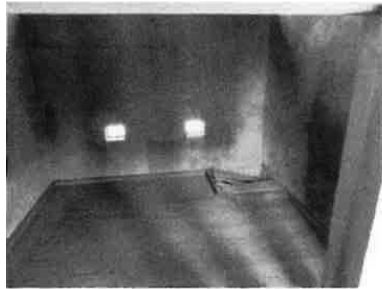
1953年成立のらい予防法により、ハンセン病患者が入学できる高校が開設された。愛生園内の岡山県立邑久高等学校新良田教室である。前述したように、ここにも、生徒の心を傷つけるような差別があった。健常者である教員は予防着（白衣）を着て、教壇に立ち、患者である生徒とは距離を取る者が多かった。教務室に戻る前に、手をクレゾール液に漬けてから水で手を洗った。生徒が提出した作文・答案は^{くんじょう}燻蒸し、代金は消毒液に漬

け、紙幣は窓ガラスに貼って乾かした。ベル制と言って、教務室にいる個々の教員を呼び出すには、モールス信号に似た音連続で区別した。—これらは自主映画にも出てくる生徒差別である。

3.4 懲戒検束権と監房における人権侵害



写真⑰ 呂久光明園の監房



写真⑱ 監房内部

療養所園長には1931年に懲戒検束権が与えられた。懲罰には、譴責・謹慎・減食・監禁があった。謹慎及び減食、監禁及び減食もあった。療養所は一種の治外法権の場所であった。各園には監房が造られ、逃走や逃走の援助、職員への暴行・脅迫、所内の安寧秩序の妨害は、監禁の対象となった。現在、呂久光明園の監房（写真⑰⑱⑲）は学芸員に頼めば見学可能である。



写真⑲ 格子で仕切られた独房

草津の栗生楽泉園は1938年に、「特別病室」（重監房）を開設。30日以内の監禁後、1日のみ牢から出すという非人道的な扱いを幾度も繰り返した

結果、1947年の重監房廃止までに、全収容者92人中22人が「獄死」した。強制隔離政策における重大な人権侵害の事例を知りたければ、この重監房跡と国立重監房資料館の見学は必須である。また、重監房廃止後の1953年には、菊池恵楓園に「医療刑務所」が開設された。

3.5 強制隔離政策の廃止と償い

強制隔離政策の廃止と償いへの努力は、1990年代後半からの原告勝訴や補償への流れを形成した。その一連の動き（1996年～2008年）は、つぎのとおりである。

- 1) 1996年3月にらい予防法（新法）が廃止され、89年間続いた強制隔離政策に終止符を打った¹⁶⁾。参議院厚生委員会はその附帯決議の中で、「一般市民に対して、また学校教育の中でハンセン病に関する正しい知識の普及啓発に努め、ハンセン病に対する差別や偏見について、さらに一層の努力をすること」と決議した。
- 2) 1998年から2001年まで「らい予防法」違憲国賠訴訟¹⁷⁾が行われた西日本訴訟の熊本地裁（杉山正士裁判長）は、原告が「人生被害」を蒙ったと判じ、原告が勝訴、国は控訴を断念した。後発の東日本訴訟（東京地裁）と瀬戸内訴訟（岡山地裁）で、国は原告と和解した。
- 3) 2001年6月ハンセン病補償法が成立し、補償金が支給された。
- 4) 2008年ハンセン病問題基本法が成立した。

3.6 ハンセン病患者家族への償い

ハンセン病患者同様、多大な人生被害を蒙った患者家族への償いも最近の流れである。

- 1) 2016年から2019年6月までハンセン病家族国賠訴訟が行われ、熊本地裁での訴訟は原告勝訴、国は控訴せず。裁判長は、原告が「人生被害」

(村八分, 就学拒否・通学拒否, 結婚差別, 就労拒否, 進路や交友関係など人生の選択肢の制限, 親族との絶縁等)を蒙ったと判じた¹⁸⁾。

3.5の2) 国賠訴訟の判決を参照。

- 2) 2019年11月ハンセン病家族補償法が成立・施行。親子・配偶者らに180万円, 兄弟らに130万円の補償。申請期限は2020年11月21日。中には申請を控える者もいた。
- 3) 2019年11月改正ハンセン病問題基本法成立。差別禁止や名誉回復, 福祉増進などの対象に「家族」を加える。ハンセン病家族国賠訴訟原告勝訴を受けての立法化である¹⁹⁾。

3.7 国が怠った義務などーハンセン病家族国賠訴訟

ハンセン病家族国賠訴訟熊本地裁判決(2019年6月28日)は, 国が怠った義務などについて, 大臣と国会議員に対してつぎのように摘示している。

- ・厚生労働大臣：隔離政策などの廃止義務や偏見・差別を除去する義務
- ・法務大臣：偏見差別を除去する義務
- ・文部科学大臣：偏見差別是正を含む人権啓発, 教育の適切な措置の義務
- ・国会議員：隔離規定の改廃などの立法措置(長期間, 立法不作為)

但し, 強制隔離政策を遂行していたのは, 国だけではない。「隔離政策に積極的に関与しなかった, 大多数の傍観者の存在が隔離政策を遂行させた」(川崎 2020: 3)のである。

3.8 桃山学院大学「総合人間学」における学生の意見①～③

2020年5月27日に実施した桃山学院大学「総合人間学」(チーフ・梅山秀幸)のオンライン授業は, 筆者橋内が担当し, 「ハンセン病隔離政策の過ちと償い」について取り上げた。その上で, 「ハンセン病問題についてあなたが思うことを述べなさい」という課題を出し, 「200字程度でまとめ

ること」と指示した。以下、授業に参加した学生の中から3名の意見を紹介する。[]内は橋内による。

3.8.1 学生の意見①

まず、学生 Y. M. は、元患者が受けた差別について小学校時代に聞いたことがあり、それは新型コロナウイルス感染者への差別に通じるものがあると断じた。関連して、感染者差別をなくすシトラスリボン運動を参照。

「私が小学生の時に、以前ハンセン病にかかっていた方のお話を聞いたことがある。お話を聞いたときに、同じ人間なのにどうしてそこまでハンセン病患者の人が差別を受けなくてはならなかったのかと思った。それは現在も変わらず思っており、ハンセン病患者が受けた、あまりに酷い差別行為に非常に憤りを感じる。

現在はコロナウィルスが流行っているが、病気には感染したくて感染したわけではない。感染した人も感染していない人も同じ人間であるため、感染した人に対する差別をいち早く「解消」して欲しいと思う。」(Y. M.)

3.8.2 学生の意見②

二番目の学生 K. R. は、愛生園について学んだり、インドの療養施設を訪問したりした結果、「周りの人たちのハンセン病への理解がとても重要だと気付いた」と言う。

「私は小学校か中学校の人権教育で岡山の長島愛生園について学んだことが記憶にあります。また、今年はインド「コルカタ」のハンセン病患者の療養施設とその患者たちが社会復帰している場所を訪れました。

そして、今回の学習でハンセン病について学んでわかったことがある。周りの人たちのハンセン病への理解がとても重要だと気付いた。正しい知識と情報があれば、ハンセン病患者が差別されることなく上手くやっていけるのだと思う。日本で起こった差別も誤った知識と情報によって起こったことである。そして、正しい情報と知識を伝えるために、今後も人権教

育などで学び続ける必要があると思う。」(K. R.)

3.8.3 学生の意見③

第三の学生 S. K. は、ハンセン病患者が経験した辛苦を思いやり、ハンセン病に関してもっと学校教育で教えるべきだと主張している。

「私は〔ハンセン病による〕身体的苦痛が想像を絶するものであった上に、社会の偏見や差別と闘わなければならなかった患者の方たちの苦しみを思うと胸がしめつけられました。

そして、差別や偏見をなくすには、それから目を背けるのではなく、事実を受け止め、しっかりした知識のもとで学び、理解することが必要であると思います。国は、もっとハンセン病について、教育の場で私たちが子供たちに教えるべきであると思います。そしてそれはすべての人権問題や差別問題に共通して言えることだと思います。」(S. K.)

4. 結びにかえて―自主映画を人権教育のために

3.8のような学生の的確な反応からして、「らい予防法」に基づくハンセン病隔離政策について学習することは、人権教育の上で非常に意義深いと思われる。すでに述べたように、ハンセン病はらい菌による極めて弱い感染症であるにもかかわらず、患者は療養所に強制収容され、入所に当っては徹底消毒され、隔離されたのであった。療養所は無菌地帯と有菌地帯に分けられ、患者は無菌地帯に入れないという患者差別があった。退所規定がないため、基本的に終生隔離であった。患者だけでなく、家族もさまざまな「人生被害」を蒙ったことは、3.6に述べたハンセン病家族国賠訴訟から明らかである。

ところで、戦後世界の潮流が通院治療に向かう中で、日本では強制隔離政策を89年の長きに亘って継続させた。このことは、3.7に挙げた立法・行政・司法の三権のみならず、医学界・法曹界・教育界・メディアが怠慢

「らい予防法」下の新良田教室

の誹りを免れない。「らい予防法」が廃止されたのは、3.5に記したように、ようやく1996年のことである。その後、二度の国賠訴訟熊本地裁判決とそれを受けての立法化によって、患者と家族に対する補償がなされた。だが、ハンセン病への偏見と差別に対する闘いは、今なお続いている。この病は単なる医療問題である以上に、重大な人権問題なのである。そこで、つぎの7行を声に出して読んでみよう。そして、私たちにできることは何かを考えてみよう。

- 親や兄弟姉妹と一緒に暮らすことができない―
- 実名を名乗ることができない―
- 結婚しても子供を生むことができない―
- 一生療養所から出て暮らすことができない―
- 死んでも故郷の墓に埋葬してもらえない―

こうした生活をハンセン病患者さんは長い間強いられてきました。
あなたは想像できますか。(厚生労働省)

筆者が思うに、「らい予防法」下の新良田教室について理解を深めるためには、まずは自主映画「ベルの音が聞こえる」(山本 守監督)を視聴すべきであろう。この自主映画の製作には、オーディションで選ばれた主な出演者の他に、岡山県内の市民や邑久高生を含む高校生がボランティアで参加した。奇しくも岡山県立邑久高校が創立百周年を迎えた記念すべき年に、その分校であった新良田教室を舞台とした映画が完成したことは、意義深いことである。2020年は愛生園開園90周年の節目にも当たっていた。

2020年12月5日には、長島愛生園の愛生会館で瀬戸内市と備前人権擁護委員協議会共催の人権啓発映画会が開催された。竹久顕也市長の挨拶、中尾伸治自治会会長の講話の後、スクリーンに映像が映し出された。上映後、山本監督の製作事情説明と横田元教諭の談話があった。定員先着50名。こ



写真⑳ 愛生会館（映画会会場）



写真㉑ 映画会ポスター（会場入口）

の映画会には、岡山県内はもとより、東京から熱心家3名も駆けつけた。

最後に、この映画を今後各地の研修会・学習会で上映することは、ハンセン病の啓発活動への有力な未来展望を拓くものである。映画上映と合わせて、小論『『らい予防法』下の新良田教室—自主映画『ベルの音が聞こえる』を視る前に』が、ハンセン病に関する人権教育と社会啓発に微力ながらもお役に立てば幸いである。

—そして、2021年現在、新型コロナのパンデミックで価値観が揺れる世界に生きる我々も、いま一度さまざまな差別問題を直視しつつ、映画のエピローグ（2.20）で朗読された30年後のタイムカプセルから甦る言葉に対する答えを出さねばなるまい。

それとも・・・今でも時々、

・・・ベルの音が聞こえますか？

時代と地域の相違や差別の種類を問うことなく、差別の象徴であるベルの音が「聞こえる」が筆者の答えである。そして、その音を聞きつつも、自主映画「ベルの音が聞こえる」における主題の二重構造への理解が必要であろう。それは、“差別”という通奏低音とともに、“人間讃歌”の主旋

「らい予防法」下の新良田教室

律を聴き取ることである。病と差別に苦しみつつも、それぞれの青春を懸命に生き抜いた若き群像と、彼らの成長を見守った人々を描いた映像は、将来的に“差別克服と未来への遺産”となることを信じてやまない。

付記

筆者橋内は、①自主映画「新良田レクイエム」製作実行委員会の構成員であり、②講演『「らい予防法」下の新良田教室—自主映画『ベルの音が聞こえる』を視る前に』を行う一方で、③映画の前振りに証言者として出演、④映画の監修にも若干関わった。本稿の執筆は、これら映画づくりの経験の他、⑤国立13と私立1を含む全国14の療養所訪問・見学と⑥関連文献の渉猟によるものである。なお、本稿に掲載した写真は、シナリオの表紙と自主映画のチラシを除いて、すべて筆者が国立療養所のある瀬戸内市で撮影したものである。

謝辞

この度、定年を迎えられた国際教養学部 梅山秀幸教授と日下隆平教授には長年に亘り、公私ともに貴重な示唆をいただいたことを感謝する。また、『新良田—閉校記念誌』は本稿の基本資料として活用したが、その記念誌を編纂・執筆した横田廣太郎元教諭には、原稿と校正刷のすべてに目を通していただき、正確を期すことができた。そして、草稿の段階で、映画監督の山本 守氏には、「第2部 自主映画『ベルの音が聞こえる』の世界」を通読の上、的確なコメントをいただいた。ここに、一言記して謝意を表わしたい。但し、あり得る誤記は、すべて筆者橋内の責任に帰する。

注

- 1) 「無らい県運動」については、3.2でも言及。無らい県運動研究会編(2014)を参照。
- 2) 竜田寮事件とは、この寮に預けられた未感染児童たちが、熊本市立黒髪小学校への通学をPTAによって阻止された事件である。黒髪校(通学拒否)事件とも言う。国立療養所菊池恵楓園入所者自治会(2006:82~89)参照。
- 3) 稀代の名判決。ハンセン病違憲国賠訴訟弁護団(2003)は、詳細なドキュメント。

- 4) 全国ハンセン病療養所入所者協議会（2001：176-181）参照。
- 5) 全国ハンセン病療養所入所者協議会（2001：179）および『新良田―閉校記念誌』（1987：40-43）参照。
- 6) 全国ハンセン病療養所入所者協議会（2001：179）および『新良田―閉校記念誌』（1987：43）参照。
- 7) 国立ハンセン病資料館（2018：5-15）の解説・邑久長島架橋運動史が要を得ている。
- 8) 大谷藤郎（元厚生官僚）が、「らい予防法」廃止に向けて尽力した。強制隔離政策の廃止による社会復帰の支援と療養生活の継続保障が特徴である。大谷（1996）参照。
- 9) 菊池恵楓園の入所者らが、予約していた熊本県の黒川温泉ホテル・アンレディーズへの宿泊が拒否された事件。営業停止となり、廃業した。恵楓園には、誹謗中傷の葉書・封書（匿名）が殺到した。国立療養所菊池恵楓園入所者自治会（2006：96-100）を参照。
- 10) ハンセン病補償法は、国立ハンセン病資料館（2010）にも収録されている。
- 11) 光田健輔は国立癩療養所の第一候補として、西表島を推薦したが、内務省の同意が得られず、次候補の長島が選ばれて愛生園が開設された。邑久光明園は、大阪の神崎川河口中州に造られた外島保養院が室戸台風で倒壊した後、長島の西端に移転・再興して名称を変更したものである。大島青松園（旧・大島療養所）は、高松沖の大島に連合公立療養所として創設された。以上の三療養所を「瀬戸内三園」と称することがある。
- 12) 多磨全生園（旧・全生病院）と菊池恵楓園（旧・九州療養所）は、大都市東京と熊本の周辺部に立地する。奄美和光園は、1943年に旧名瀬市市街地から外れた三方山で囲まれた谷間に創設された。松丘保養園は、青森の村外れに開設された。栗生楽泉園（群馬県草津町）は、海拔1000メートルを超す寒冷地にあり、「重監房」があった。駿河療養所（静岡県御殿場市）は本来傷痍軍人のために造られたものだが、杉木立を切り拓いた山の斜面に建つ。和光園以外には、所謂「ハンセン病博物館」がある。
- 13) 神山復生病院は、駿河療養所に近い山麓にある療養所。1889年にフランス人神父テストウィードが開設した施設が、今日まで続いている。コロニアル・スタイルの復生記念館（旧・事務本館）が見学先である。古雅な柱時計

「らい予防法」下の新良田教室

と婦長井深八重の献身的な働きが特に目を引く。

- 14) 全盲連による年金獲得運動の結果、1959年障害福祉年金を受給開始（有蘭 2017）。
- 15) 全国ハンセン氏病患者協議会（1977）及び金貴粉（2019）を参照。
- 16) 「らい予防法」が廃止されると、同時に「らい予防法の廃止に関する法律」が成立した。参議院厚生委員会による附帯決議も参照。この折り、中山秋夫（光明園）は「慣されて飛べなくされて放たれる」という川柳を作句した（国立ハンセン病資料館2016）。長年続いた「らい予防法」による強制隔離政策への痛烈な批判である。
- 17) 菊池恵楓園と星塚敬愛園の入所者による熊本地裁への提訴（西日本訴訟）から始まり、東日本訴訟（東京地裁）と瀬戸内訴訟（岡山地裁）が後追いした。この間の事情については、ハンセン病違憲国賠訴訟弁護団（2003）が詳細な記録を残している。
- 18) ハンセン病家族訴訟弁護団（2018）参照。鳥取訴訟は地裁，高裁，最高裁のすべてで原告敗訴に終わった。他方，熊本訴訟は地裁判決で原告が勝訴し，国が控訴しなかったため，判決が確定した。ハンセン病違憲国賠訴訟同様，判決文で「人生被害」を摘示した。
- 19) 小論で簡潔に述べたハンセン病療養所の過去・現在・未来については，川崎（2020）のより詳細な記述を参照。

参考文献

- 朝日新聞（2019.8.11）．隔離下の球児 朝日新聞第2 岡山
蘭 由岐子（2017）．「病いの経験」を聞き取る—ハンセン病患者のライフヒストリー 生活書院
伊波敏男（1997）．花に逢わん 日本放送協会出版（のちに人文書院から再刊）
大岡 信・大谷藤郎・加賀乙彦・鶴見俊輔編（2006）．ハンセン病文学全集 第8巻短歌 皓星社
大岡 信・大谷藤郎・加賀乙彦・鶴見俊輔編（2010）．ハンセン病文学全集 第9巻俳句 川柳 皓星社
大谷藤郎（1996）．らい予防法廃止の歴史 勁草書房
岡山県立邑久高等学校新良田教室閉校事業実行委員会編（1987）．新良田一閉

- 校記念誌 岡山県立邑久高等学校新良田教室閉校事業実行委員会
川崎 愛 (2020). ハンセン病は人に何をもたらしたのか—ハンセン病療養所の
創設から現代まで 流通経済大学出版社
金貴粉 (2019). 在日朝鮮人とハンセン病 クレイン
金城幸子 (2007). 「ハンセン病」だった私は幸せ. ボーダーインク
厚生労働省 (2019). ハンセン病の向こう側 (パンフレット) 厚生労働省
国立ハンセン病資料館 (2010). ハンセン病関連法令等資料集 国立ハンセン
病資料館
国立ハンセン病資料館 (2016). 「らい予防法」をふりかえる 国立ハンセン病
資料館
国立ハンセン病資料館 (2017). ハンセン病博物館へようこそ 国立ハンセン
病資料館
国立ハンセン病資料館 (2018). 橋を渡る—邑久長島大橋架橋30周年記念 国
立ハンセン病資料館
国立療養所菊池恵楓園入所者自治会 (2006). 壁をこえて 国立療養所菊池恵
楓園入所者自治会
山陽新聞社編 (2017). 語り継ぐハンセン病—瀬戸内三園から 山陽新聞社
清水 寛編著 (2016). ハンセン病児問題史研究—国に隔離された子ら 新日本
出版社
全国ハンセン氏病患者協議会編 (1977). 全患協運動史—ハンセン氏病患者の
闘いの記録 一光社
全国ハンセン病療養所入所者協議会編 (2001). 復権の日月—ハンセン病患者
の闘いの記録 光陽出版
長島愛生園入所者自治会編 (1998). 曙の潮風—長島愛生園入園者自治会史
長島愛生園入所者自治会
橋内 武 (2019). 強制隔離政策下の療養所生活—長島 2 園を中心に. 桃山学院
大学総合研究所紀要 第44巻第 3 号31-73
橋内 武 (2020). ハンセン病隔離政策の過ちと償い—「らい予防法」の廃止
(1996年) とその後 桃山学院大学人権年報 第46号 5-22
ハンセン病違憲国賠訴訟弁護団編 (2003). 開かれた扉—ハンセン病裁判を闘っ
た人たち 講談社

「らい予防法」下の新良田教室

ハンセン病家族訴訟弁護団編（2018）. 家族がハンセン病だった—家族訴訟の証言 六花出版

「ハンセン病をどう教えるか」編集委員会編（2003）. ハンセン病をどう教えるか 解放出版社

樋渡直哉（2013）. 患者教師・子どもたち・絶滅隔離＜ハンセン病療養所＞ 地歴社

藤田真一編著（1996）. 証言・日本人の過ち—森元美代治・美恵子は語る 人間と歴史社

藤野 豊（2020）. 強制不妊と優生保護法 岩波書店

冬 敏之（1959）. 新良田教室論 愛生 第13巻3号（新良田—閉校記念誌に再録）

ふれあい福祉協会（2018）. ハンセン病退所者実態調査報告書 ふれあい福祉協会

無らい県運動研究会編（2014）. ハンセン病絶対隔離政策と日本社会—無らい県運動の研究 六花出版

毎日新聞（2020.12.25）. 記憶のバトン—長島愛生園90年（下） 毎日新聞岡山版

山口さやか（2018）. 沖縄県のハンセン病の動向 *LASR* Vol. 39, 2月号 pp. 18-19

山本 守（2020）. ベルの音が聞こえる（第7版）自刊

映画

自主映画「ベルの音が聞こえる—長島、隔離の青春物語」, 脚本・監督 山本 守, 製作「ベルの音が聞こえる」製作実行委員会, 90分, 2021

Niirada Branch, Oku High School, under the Leprosy Prevention Law— the Film ‘Listen to the Bell Ringing’

HASHIUCHI Takeshi

After a struggle against revising the Leprosy Prevention Law (らい予防法) of 1953, a high school for young patients was founded at Aiseien Sanatorium, Nagashima Island, Setouchi City, Okayama Prefecture in September, 1955. The school was named Niirada Branch, Oku High School (邑久高校新良田教室). It was officially managed by the Okayama educational authorities, staffed by the local teachers, and financially supported by the Japanese Government.

Students from all over Japan entered the school, boarding at Aiseien, and attending classes four periods a day for four years. Each class had up to 30 students, with enrollment steadily declining. The high school branch closed in March, 1987, with a total of 307 graduates over 32 years. Now there remains a school monument at the site.

Because the Leprosy Prevention Law regarded Hansen's disease patients as the source of a 'terrible infectious disease', sanatorium authorities disinfected the patients' body and personal effects on their arrival at the lonesome island colony. The law enforced its isolation policy not only by sending them to the remote sanatorium but also by discriminating against them within the premises, dividing the patient quarter from the non-patient quarter. The high school classrooms were in the patient quarter.

Most school teachers actually had a strong prejudice and discriminated against the patient students. Being afraid of Hansen's disease infection, the teachers wore 'prevention gowns' to go to the classrooms. They taught their

subjects always on the platform without coming down to the student level. There was clearly physical and psychological distance between teachers and students.

On the other hand, the patient students were not allowed to enter the teachers' room in the non-patient quarter. In order to meet an individual teacher, a student had to ring the bell at the entrance several times like Morse code. Then the teacher came out of their room to converse with the student. This was thought to be a form of prejudice and discrimination against such students. Thus they asked the head teacher to change the system. There were several debates between both camps. The bell system was eventually abandoned in 1973 so that the students could enter the teachers' space for consultation.

Based on the above story, a movie entitled 'Listen to the Bell Ringing' (「ベルの音が聞こえる」) was made by a group of Okayama citizens under the direction of YAMAMOTO Mamoru (山本守). They were all amateur actors who either auditioned or volunteered. After over a year of filming, they completed the production, and began showing the movie in Setouchi City in the winter of 2020. The film is now expected to be shown at several leprosy sanatoria and educational institutions all over Japan so as to enlighten the people about the basic human rights regarding prejudice and discrimination against the Hansen's disease patients and their families.